

0001 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：基礎	
「かぜ（感冒）」について、最も適切なのはどれか。 ア 主にウイルスが鼻や喉などに感染して起こる上気道の急性炎症の総称である。 イ 原因は常に細菌感染であり、抗菌薬を用いないと治癒しない。 ウ 主な症状は消化器症状に限られ、呼吸器症状は通常みられない。 エ 感染力が強く重症化しやすいインフルエンザと同一の疾患として扱う。	答え・解説 正答：ア ア：かぜは単一の疾患名ではなく、主としてウイルス感染による上気道の急性炎症をまとめた「かぜ症候群」で、通常は数日～1週間程度で自然寛解する。 イ：かぜの約8割はウイルス感染が原因とされ、細菌感染だけが原因ではない。 ウ：くしゃみ、鼻汁、鼻閉、咽喉痛、咳、痰などの呼吸器症状が代表的にみられる。 エ：インフルエンザはかぜと同じくウイルス性呼吸器感染だが、感染力や重症化リスクのため区別して扱われる。 総合：かぜは単一の疾患名ではなく、主としてウイルス感染による上気道の急性炎症をまとめた「かぜ症候群」で、通常は数日～1週間程度で自然寛解する。
0002 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：基礎	
一般用のかぜ薬の働きとして、適切なのはどれか。 ア 原因ウイルスの増殖を直接抑え、体内から除去することを主目的とする。 イ 発熱、咳、鼻水などの諸症状を緩和する対症療法を目的とする。 ウ 免疫反応を完全に停止させて発熱を起こさないようにする。 エ 細菌感染を予防するため、健康な時から連日服用する。	答え・解説 正答：イ ア：一般用のかぜ薬はウイルスの増殖抑制や除去を目的とするものではない。 イ：かぜ薬は原因ウイルスを除去する薬ではなく、発熱、咳、鼻汁・鼻閉、咽喉痛などの症状を緩和する対症療法薬である。 ウ：発熱は生体防御反応でもあり、かぜ薬が免疫反応を完全に止めるわけではない。 エ：予防目的の運用は適切ではなく、症状緩和のために必要な範囲で使用する。 総合：かぜ薬は原因ウイルスを除去する薬ではなく、発熱、咳、鼻汁・鼻閉、咽喉痛などの症状を緩和する対症療法薬である。

0003 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：標準	
発熱だけが明確で、咳や鼻水など他のかぜ症状はほとんどない購入者への対応として、最も適切なのはどれか。 ア 症状が一つでも、必ず多成分配合の総合感冒薬を選ぶ。 イ 症状が軽ければ、用法用量を超えて服用回数を増やす。 ウ 症状に応じて解熱鎮痛薬など、必要な薬効に絞った製品も選択肢として検討する。 エ 症状が限定されているほど、複数のかぜ薬を併用する。	答え・解説 正答：ウ ア：不要な成分まで摂取する可能性があり、症状が限定される場合は単一の薬効群が適することがある。 イ：用法用量を超えた使用は副作用や過量摂取のリスクを高めるため不適切である。 ウ：かぜだから常に総合感冒薬が最適とは限らない。症状がはっきり限定されている場合は、その症状に対応する薬効群を選ぶ方が必要な成分の摂取を避けやすい。 エ：同一・同種成分の重複により作用や副作用が強くなるおそれがある。 総合：かぜだから常に総合感冒薬が最適とは限らない。症状がはっきり限定されている場合は、その症状に対応する薬効群を選ぶ方が必要な成分の摂取を避けやすい。
0004 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：基礎	
かぜ薬に配合される抗ヒスタミン成分について、適切なのはどれか。 ア 痰を溶かして排出しやすくすることだけを目的に配合される。 イ 原因ウイルスを不活化する殺ウイルス作用を期待して配合される。 ウ 服用後の眠気を防ぐため、必ずカフェインと同量で配合される。 エ 鼻汁やくしゃみを和らげる目的で配合されるが、眠気や口渇などに注意が必要である。	答え・解説 正答：エ ア：痰の切れを良くする主な成分は去痰成分であり、抗ヒスタミン成分の主目的とは異なる。 イ：抗ヒスタミン成分はウイルスを除去する成分ではない。 ウ：カフェインの有無にかかわらず抗ヒスタミン成分による眠気には注意が必要であり、必ず同量配合されるわけではない。 エ：抗ヒスタミン成分は鼻汁・くしゃみ等の緩和に用いられ、眠気、口渇などの副作用が現れることがある。 総合：抗ヒスタミン成分は鼻汁・くしゃみ等の緩和に用いられ、眠気、口渇などの副作用が現れることがある。

0005 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：標準	
コデインリン酸塩水和物又はジヒドロコデインリン酸塩を含むかぜ薬について、適切なのはどれか。 ア 依存性がある成分であり、12歳未満の小児には使用しない。 イ 依存性はないため、長期連用しても差し支えない。 ウ 3歳未満に限って禁忌で、12歳未満には通常使用できる。 エ 咳を抑える作用はなく、鼻水だけを抑える成分である。	答え・解説 正答：ア ア：コデイン及びジヒドロコデインは依存性を有する麻薬性鎮咳成分で、12歳未満の小児には使用禁忌とされる。 イ：依存性があり、長期連用や大量摂取は不適切である。 ウ：12歳未満の小児には使用しないとされている。 エ：延髄の咳嗽中枢等に作用して咳を抑える鎮咳成分である。 総合：コデイン及びジヒドロコデインは依存性を有する麻薬性鎮咳成分で、12歳未満の小児には使用禁忌とされる。
0006 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：基礎	
かぜ薬に痰の切れを良くする目的で配合される成分として、適切なのはどれか。 ア ジフェンヒドラミン塩酸塩 イ プロムヘキシン塩酸塩 ウ イブプロフェン エ スコポラミン臭化水素酸塩水和物	答え・解説 正答：イ ア：主に抗ヒスタミン作用を示し、催眠鎮静薬やアレルギー関連薬等に用いられる。 イ：プロムヘキシン塩酸塩は、痰の切れを良くする去痰成分の一つである。 ウ：解熱鎮痛・抗炎症成分であり、去痰成分ではない。 エ：抗コリン成分で、主に乗物酔い防止薬等に用いられる。 総合：プロムヘキシン塩酸塩は、痰の切れを良くする去痰成分の一つである。

0007 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：標準	
咽喉痛を訴える購入者が「脳血栓の治療中」と申し出た。トラネキサム酸を含むかぜ薬への対応として最も適切なのはどれか。 ア 血栓とは無関係の成分なので、特に確認せず使用を勧める。 イ 血栓を積極的に溶かす成分なので、治療薬の代わりとして勧める。 ウ 血栓を溶けにくくする働きもあるため、治療中の医師又は調剤した薬剤師への相談を勧める。 エ 外用成分に限って血栓に影響するため、内服では問題ない。	答え・解説 正答：ウ ア：血栓に関する注意があるため、無確認での使用推奨は不適切である。 イ：トラネキサム酸は血栓溶解薬ではなく、逆に凝固した血液を溶けにくくする作用に留意する。 ウ：トラネキサム酸は抗炎症目的で用いられる一方、凝固した血液を溶解されにくくする働きがあるため、血栓のある人・起こすおそれのある人では事前相談が必要である。 エ：かぜ薬など内服で用いる場合にも血栓に関する注意が必要である。 総合：トラネキサム酸は抗炎症目的で用いられる一方、凝固した血液を溶解されにくくする働きがあるため、血栓のある人・起こすおそれのある人では事前相談が必要である。

0008 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：応用	
グリチルリチン酸を含むかぜ薬について、最も適切なのはどれか。 ア 40mg以上でも、若年者なら長期連用して差し支えない。 イ 偽アルドステロン症とは無関係で、主な問題は低血糖だけである。 ウ 食品由来のグリチルリチン酸は総摂取量に考慮する必要がない。 エ 1日最大服用量がグリチルリチン酸として40mg以上となる製品は、対象者を問わず長期連用を避ける。	答え・解説 正答：エ ア：40mg以上となる製品は対象者を問わず長期連用を避ける。 イ：グリチルリチン酸の過量では偽アルドステロン症が重要な副作用となる。 ウ：食品や他の医薬品からも摂取され得るため、総摂取量が過剰にならない配慮が必要である。 エ：グリチルリチン酸の大量摂取は偽アルドステロン症につながり得る。1日最大40mg以上となる製品は長期連用を避け、むくみ・心臓病・腎臓病・高血圧のある人や高齢者では特に慎重な判断が必要である。 総合：グリチルリチン酸の大量摂取は偽アルドステロン症につながり得る。1日最大40mg以上となる製品は長期連用を避け、むくみ・心臓病・腎臓病・高血圧のある人や高齢者では特に慎重な判断が必要である。

0009 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：標準	
総合感冒薬を服用中の人が、さらに鼻炎用内服薬と鎮咳去痰薬を追加したいと相談した。最も適切な説明はどれか。 ア 同じ成分又は同種の作用を持つ成分が重複するおそれがあるため、安易な併用は避ける。 イ 薬効群が違えば成分は重複しないので、自由に併用できる。 ウ 併用すると必ず効果が相殺されるため、効かなくなることだけが問題である。 エ 総合感冒薬は単一成分製剤なので、重複摂取は起こらない。	答え・解説 正答：ア ア：かぜ薬には複数成分が配合されていることが多く、鼻炎用薬・鎮咳去痰薬・アレルギー用薬等との併用で重複摂取となり、作用や副作用が強く出るおそれがある。 イ：異なる薬効群でも抗ヒスタミン成分や鎮咳成分などが重複することがある。 ウ：問題は効果の相殺だけでなく、作用や副作用の増強である。 エ：総合感冒薬は通常、複数の有効成分を含む。 総合：かぜ薬には複数成分が配合されていることが多く、鼻炎用薬・鎮咳去痰薬・アレルギー用薬等との併用で重複摂取となり、作用や副作用が強く出るおそれがある。
0010 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：標準	
かぜ薬を服用している期間中の飲酒について、適切なのはどれか。 ア アルコールは薬効を必ず弱めるだけなので、少量なら積極的に併用する。 イ アルコールが成分の吸収や代謝に影響し、肝機能障害等の副作用を起こしやすくなるため控える。 ウ 食後に飲酒すれば相互作用は完全に避けられる。 エ 生薬成分を含まない製品では飲酒の影響は一切ない。	答え・解説 正答：イ ア：副作用の増強や肝機能障害等が問題となるため、積極的併用は不適切である。 イ：アルコールは医薬品成分の吸収や代謝に影響し、肝機能障害等の副作用リスクを高め得るため、かぜ薬服用中は飲酒を控える。 ウ：食事の有無にかかわらず飲酒を控えることが基本である。 エ：一般的にかぜ薬服用中の飲酒は避ける必要がある。 総合：アルコールは医薬品成分の吸収や代謝に影響し、肝機能障害等の副作用リスクを高め得るため、かぜ薬服用中は飲酒を控える。

0011 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：応用	
「高熱があり、黄色く濁った痰が出て、息苦しさを伴う激しい咳がある」という相談への対応として、最も適切なのはどれか。 ア 通常のかぜとみなし、同じかぜ薬を1か月程度続ける。 イ 症状が強いほど、複数のかぜ薬を同時に服用する。 ウ 一般用医薬品による自己治療を優先せず、医療機関の受診を勧める。 エ 痰の色は受診判断に関係しないため、確認する必要はない。	答え・解説 正答：ウ ア：重症感染症などの可能性があり、漫然と継続すべきではない。 イ：成分重複と副作用増強のおそれがあり、受診が優先される。 ウ：高熱、膿性の鼻汁・痰、激しい咽頭痛・腫脹、呼吸困難を伴う激しい咳などは、一般用医薬品での自己治療より初めから医療機関受診が望ましい。 エ：黄色・緑色の膿性痰などは受診勧奨の重要な手がかりとなる。 総合：高熱、膿性の鼻汁・痰、激しい咽頭痛・腫脹、呼吸困難を伴う激しい咳などは、一般用医薬品での自己治療より初めから医療機関受診が望ましい。
0012 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：標準	
かぜ様症状が4日以上続いている場合の考え方として、適切なのはどれか。 ア 4日以上続けば必ず自然治癒の最終段階なので、受診は不要である。 イ 症状が続くほど、用法用量を倍にすればよい。 ウ 症状の持続期間は医薬品選択に一切関係しない。 エ 単なるかぜではない可能性も考え、症状や重症度に応じて医療機関受診を検討する。	答え・解説 正答：エ ア：長引く症状は別疾患や合併症を考慮する必要がある。 イ：用法用量を超える使用は副作用リスクを高める。 ウ：経過は受診勧奨の重要な情報である。 エ：急激な発熱、4日以上続く症状、重篤な症状では、かぜ以外の疾患の可能性が高まり、受診を考える必要がある。 総合：急激な発熱、4日以上続く症状、重篤な症状では、かぜ以外の疾患の可能性が高まり、受診を考える必要がある。

0013 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：応用	
慢性の呼吸器疾患と心臓病がある人が、発熱と咳を「いつものかぜ」と自己判断して市販薬だけで対処したいと相談した。最も適切なのはどれか。 ア 基礎疾患の悪化や合併症を避けるため、初めから医療機関の受診を勧める。 イ 基礎疾患があるほど一般用かぜ薬だけで長期管理すべきである。 ウ 心臓病はかぜ薬の選択や受診判断に影響しない。 エ 症状が同じなら、過去に使った薬を無期限に再使用してよい。	答え・解説 正答：ア ア：慢性呼吸器疾患、心臓病、糖尿病などの基礎疾患がある人では、基礎疾患悪化や合併症のリスクから、初めから医療機関受診が望ましい。 イ：基礎疾患がある場合は自己治療に固執せず医療機関受診が望ましい。 ウ：基礎疾患は安全性と病状悪化の両面で重要な確認事項である。 エ：病状や併用薬は変化し得るため、現在の状況に基づく判断が必要である。 総合：慢性呼吸器疾患、心臓病、糖尿病などの基礎疾患がある人では、基礎疾患悪化や合併症のリスクから、初めから医療機関受診が望ましい。
0014 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [かぜ薬] 難易度：標準	
1歳児にかぜ症状があると保護者から相談を受けた。一般用かぜ薬の使用について、最も適切なのはどれか。 ア 乳幼児は成人より副作用が少ないため、成人用量を体重換算せず使用する。 イ 2歳未満では医師の診断を受けさせることを優先し、やむを得ない場合にのみ服用を検討する。 ウ 2歳未満でも、受診より先に複数のかぜ薬を併用する。 エ 小児のかぜでは中耳炎を合併することはない。	答え・解説 正答：イ ア：乳幼児は薬物への反応が成人と異なり、成人用量の使用は不適切である。 イ：2歳未満の乳幼児では、まず医師の診断を受けさせることを優先する。小児のかぜでは急性中耳炎を併発しやすいことにも留意する。 ウ：医師の診断を優先し、安易な併用は避ける。 エ：小児では急性中耳炎を併発しやすい。 総合：2歳未満の乳幼児では、まず医師の診断を受けさせることを優先する。小児のかぜでは急性中耳炎を併発しやすいことにも留意する。

0015 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：基礎	
痛みや発熱に関与するプロスタグランジンについて、適切なのはどれか。 ア 末梢で痛みのシグナルを完全に遮断し、発熱を防ぐ生理物質である。 イ ウイルスを直接破壊して感染を終わらせる抗体の一種である。 ウ 痛みのシグナルを増幅し、温熱中枢に作用して体温を高める方向に調節する。 エ 体温を常に下げる方向にだけ働く。	答え・解説 正答：ウ ア：プロスタグランジンはむしろ痛みや発熱を増強する側に働く。 イ：プロスタグランジンは抗体ではなく、ホルモン様の働きをする物質である。 ウ：プロスタグランジンは痛覚シグナルを増幅し、温熱中枢に作用して体温を高く維持するほか、炎症にも関与する。 エ：発熱時には温熱中枢に作用し、体温を高く維持する方向に関与する。 総合：プロスタグランジンは痛覚シグナルを増幅し、温熱中枢に作用して体温を高く維持するほか、炎症にも関与する。
0016 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：基礎	
解熱鎮痛薬の位置づけとして、適切なのはどれか。 ア 感染症の原因微生物を除去することが主目的である。 イ 骨折した骨を直接修復することを主目的とする。 ウ 症状がなくても予防的に連日服用することが基本である。 エ 病気や外傷の原因を根本治療するものではなく、発熱や痛みを緩和するために用いる。	答え・解説 正答：エ ア：解熱鎮痛薬自体に感染原因の除去を目的とする作用はない。 イ：骨折原因の治療ではなく、痛みを一時的に緩和する薬である。 ウ：予防的な常用は適切でなく、症状と用法用量に応じて使用する。 エ：解熱鎮痛薬は発熱・痛みを和らげる対症療法薬であり、原因疾患そのものを治療する薬ではない。 総合：解熱鎮痛薬は発熱・痛みを和らげる対症療法薬であり、原因疾患そのものを治療する薬ではない。

0017 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：基礎	
アセトアミノフェンについて、適切なのはどれか。 ア 主として中枢作用により解熱・鎮痛を示し、末梢での抗炎症作用は期待できない。 イ 強い末梢抗炎症作用だけを示し、中枢作用はない。 ウ 胃腸障害が必ず重く、空腹時に使用できる製品は存在しない。 エ 過量使用や飲酒習慣と肝機能障害のリスクは無関係である。	答え・解説 正答：ア ア：アセトアミノフェンは主として中枢作用で解熱・鎮痛をもたらし、末梢での抗炎症作用は弱い。その分、胃腸障害は他の一部の解熱鎮痛成分より少ない。 イ：主として中枢作用による解熱・鎮痛が特徴である。 ウ：胃腸障害は比較的少なく、空腹時に服用可能な製品もある。 エ：過量使用や日常的な飲酒では肝機能障害が起こりやすくなる。 総合：アセトアミノフェンは主として中枢作用で解熱・鎮痛をもたらし、末梢での抗炎症作用は弱い。その分、胃腸障害は他の一部の解熱鎮痛成分より少ない。
0018 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：基礎	
一般用医薬品のイブプロフェンについて、適切なのはどれか。 ア 12歳未満のみ禁忌で、12～14歳には通常使用できる。 イ 15歳未満の小児には使用しない。 ウ 年齢制限はなく、乳児にも成人と同量を用いる。 エ 小児では解熱作用だけを目的に用い、鎮痛には使わない。	答え・解説 正答：イ ア：一般用医薬品では15歳未満に使用しない。 イ：一般用医薬品のイブプロフェンは、15歳未満の小児にはいかなる場合も使用しないとされている。 ウ：15歳未満には使用しない。 エ：そもそも15歳未満には一般用イブプロフェンを使用しない。 総合：一般用医薬品のイブプロフェンは、15歳未満の小児にはいかなる場合も使用しないとされている。

0019 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：標準	
イブプロフェンを希望する購入者が「潰瘍性大腸炎の既往がある」と申し出た。最も適切な対応はどれか。 ア 既往歴は関係ないため、長期連用を勧める。 イ 潰瘍性大腸炎には治療効果があるため積極的に勧める。 ウ 再発を招くおそれがあるため、使用前に医師や薬剤師へ相談するよう案内する。 エ 胃腸への作用はアセトアミノフェンより必ず弱いので確認不要である。	答え・解説 正答：ウ ア：消化管疾患の既往は重要な安全確認事項である。 イ：イブプロフェンは潰瘍性大腸炎の治療薬ではなく、再発を招くおそれがある。 ウ：イブプロフェンはプロスタグランジン産生抑制により消化管粘膜の防御機能を低下させるため、胃・十二指腸潰瘍、潰瘍性大腸炎、クローン病の既往がある人では再発に注意する。 エ：イブプロフェンは消化管粘膜防御低下に注意が必要である。 総合：イブプロフェンはプロスタグランジン産生抑制により消化管粘膜の防御機能を低下させるため、胃・十二指腸潰瘍、潰瘍性大腸炎、クローン病の既往がある人では再発に注意する。
0020 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：標準	
出産予定日まで8週間の妊婦が、一般用のイブプロフェンを希望している。最も適切な対応はどれか。 ア 妊娠末期ほど安全性が高くなるので使用を勧める。 イ 外傷による痛みなら妊娠週数を確認する必要はない。 ウ 用量を2倍にすれば使用期間を短くできるので安全である。 エ 出産予定日12週以内に該当するため、イブプロフェンは使用しないよう案内する。	答え・解説 正答：エ ア：妊娠末期には胎児や分娩への影響を考慮し、使用を避ける。 イ：使用可否の判断には妊娠時期の確認が必要である。 ウ：用法用量超過は安全性を損なう。 エ：イブプロフェンは出産予定日12週以内の妊婦では服用しないこととされている。 総合：イブプロフェンは出産予定日12週以内の妊婦では服用しないこととされている。

0021 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：標準	
小児にアセトアミノフェン坐剤を使用した直後、保護者が「内服のかぜ薬も追加したい」と相談した。確認すべき点として最も重要なのはどれか。 ア 内服薬にもアセトアミノフェン等の解熱鎮痛成分が含まれていないか確認し、重複使用を避ける。 イ 坐剤と内服薬は吸収経路が異なるので、同じ成分でも重複にならない。 ウ 坐剤は局所作用だけなので全身作用はない。 エ 坐剤を使用した後は、必ず別の解熱鎮痛薬を追加する。	答え・解説 正答：ア ア：坐剤と内服薬でも同じ有効成分が重複すれば過量となる。剤形が違っても影響し合うため、併用前に成分確認が必要である。 イ：剤形が違っても同じ有効成分の重複摂取となり得る。 ウ：解熱用アセトアミノフェン坐剤は全身作用を目的とする。 エ：追加は必須ではなく、重複や過量を避けることが重要である。 総合：坐剤と内服薬でも同じ有効成分が重複すれば過量となる。剤形が違っても影響し合うため、併用前に成分確認が必要である。
0022 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：標準	
解熱鎮痛薬の服用と飲酒について、適切なのはどれか。 ア アルコールは鎮痛効果を安定させるため、積極的に併用する。 イ アルコールは胃腸障害を増強し、アセトアミノフェンでは肝機能障害も起こりやすくするため併用を避ける。 ウ 飲酒による影響は外用鎮痛薬にしか生じない。 エ 食後なら大量飲酒しても相互作用は起こらない。	答え・解説 正答：イ ア：相互作用により副作用リスクが増えるため併用は避ける。 イ：アルコールは胃粘膜を荒らし、アスピリン、アセトアミノフェン、イブプロフェン等による胃腸障害を増強し得るほか、アセトアミノフェンの肝機能障害リスクも高める。 ウ：内服の解熱鎮痛薬との相互作用が問題となる。 エ：食事の有無で相互作用が消失するわけではない。 総合：アルコールは胃粘膜を荒らし、アスピリン、アセトアミノフェン、イブプロフェン等による胃腸障害を増強し得るほか、アセトアミノフェンの肝機能障害リスクも高める。

0023 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：標準	
片頭痛が起こるのが不安なため、症状がない日も毎朝解熱鎮痛薬を飲んでいる人への説明として、最も適切なのはどれか。 ア 予防的な毎日服用が一般用解熱鎮痛薬の標準的な使い方である。 イ 頭痛が常態化するほど薬が効いている証拠なので続ける。 ウ 症状が現れないうちから予防的に常用するのは適切でなく、連用による頭痛の常態化にも注意する。 エ 服用回数を増やせば薬物依存の可能性は下がる。	答え・解説 正答：ウ ア：一般用解熱鎮痛薬を症状なく予防的に常用することは適切でない。 イ：連用による頭痛の常態化は適正使用上の問題である。 ウ：解熱鎮痛薬は頭痛が軽いうちの服用は有効だが、症状がない段階での予防的使用は適切でない。連用により頭痛が常態化することもある。 エ：頻回使用は依存や薬剤使用過多による問題につながり得る。 総合：解熱鎮痛薬は頭痛が軽いうちの服用は有効だが、症状がない段階での予防的使用は適切でない。連用により頭痛が常態化することもある。
0024 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：応用	
「これまで経験したことがない突然の激しい頭痛があり、片腕のしびれもある」という相談への対応として、最も適切なのはどれか。 ア 市販の鎮痛薬を複数併用し、翌日まで様子を見る。 イ 頭痛は一般用医薬品で対処できるため、神経症状は無視してよい。 ウ 症状が強いほど予防目的の連用を勧める。 エ くも膜下出血等の重大な病気を疑い、直ちに医療機関受診を勧める。	答え・解説 正答：エ ア：重篤疾患の可能性があり、受診を遅らせるべきでない。 イ：神経症状を伴う突然の激しい頭痛は重要な危険徴候である。 ウ：予防的連用は不適切であり、緊急性の評価が優先される。 エ：突然の激しい頭痛や手足のしびれ、意識障害などを伴う頭痛は生命に関わる疾患の可能性があり、一般用解熱鎮痛薬だけで対処すべきではない。 総合：突然の激しい頭痛や手足のしびれ、意識障害などを伴う頭痛は生命に関わる疾患の可能性があり、一般用解熱鎮痛薬だけで対処すべきではない。

0025 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：標準	
月経痛が年々強くなっている人への対応として、適切なのはどれか。 ア 子宮内膜症などの可能性を考え、医療機関受診を勧める。 イ 月経痛は必ず生理的なものなので、増悪しても受診は不要である。 ウ 鎮痛薬の量を毎月増やすことが第一選択である。 エ 月経痛にプロスタグランジンは関与しない。	答え・解説 正答：ア ア：年月の経過とともに月経痛が次第に増悪する場合は、子宮内膜症等の可能性があるため、鎮痛薬だけで漫然と対処しない。 イ：増悪する月経痛では疾患の可能性を考慮する必要がある。 ウ：用量増加ではなく、原因疾患の評価が重要である。 エ：月経の過程にはプロスタグランジンが関与し、痛みにも関係する。 総合：年月の経過とともに月経痛が次第に増悪する場合は、子宮内膜症等の可能性があるため、鎮痛薬だけで漫然と対処しない。
0026 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：標準	
成人が発熱しているが体温は37.8 で、強い苦痛やひきつけ等はない。解熱鎮痛薬について、最も適切なのはどれか。 ア 37 台でも必ず解熱鎮痛薬で平熱以下まで下げる。 イ 平熱まで必ず下げる必要はなく、全身状態を見ながら水分・電解質補給なども行う。 ウ 水分補給は解熱鎮痛薬の効果を弱めるため避ける。 エ 体温だけ見ればよく、呼吸器・消化器・皮膚などの随伴症状は確認不要である。	答え・解説 正答：イ ア：発熱は生体防御反応でもあり、数値だけで必ず解熱する必要はない。 イ：通常、38 以下ならひきつけや著しい体力消耗のおそれは高くなく、必ず平熱まで下げる必要はない。発汗による水分・電解質喪失への補給も重要である。 ウ：発汗による脱水を防ぐため水分・電解質補給が重要である。 エ：随伴症状は重大な疾患の手がかりとなる。 総合：通常、38 以下ならひきつけや著しい体力消耗のおそれは高くなく、必ず平熱まで下げる必要はない。発汗による水分・電解質喪失への補給も重要である。

0027 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：応用	
全身性エリテマトーデスの治療中の方がイブプロフェンを希望した。適切なのはどれか。 ア 自己免疫疾患があるとイブプロフェンの安全性は高まる。 イ 無菌性髄膜炎は細菌感染なので、イブプロフェンとは無関係である。 ウ 無菌性髄膜炎を生じやすいことがあるため、使用前に医師又は薬剤師へ相談するよう案内する。 エ イブプロフェンは15歳未満にのみ注意すれば、基礎疾患の確認は不要である。	答え・解説 正答：ウ ア：むしろ無菌性髄膜炎等のリスクに注意が必要である。 イ：イブプロフェンの重篤な副作用として無菌性髄膜炎が知られている。 ウ：イブプロフェンは、全身性エリテマトーデスや混合性結合組織病のある人で無菌性髄膜炎を生じやすいとされ、事前相談が必要である。 エ：年齢だけでなく既往歴・基礎疾患も確認が必要である。 総合：イブプロフェンは、全身性エリテマトーデスや混合性結合組織病のある人で無菌性髄膜炎を生じやすいとされ、事前相談が必要である。
0028 [かぜ薬・解熱鎮痛薬] > [解熱鎮痛薬] 難易度：応用	
「頭痛薬を飲んだが熱も出たので、かぜ薬と外用鎮痛消炎薬も一緒に使いたい」という相談への対応として最も適切なのはどれか。 ア 外用薬は内服薬と一切相互作用しないので確認不要である。 イ 「頭痛薬」と「熱さまし」は作用が完全に別なので同時服用が基本である。 ウ 症状が複数なら製品数も多いほど安全性が高まる。 エ 内服薬同士だけでなく外用鎮痛消炎薬も含め、同一・同種成分の重複や副作用増強を確認する。	答え・解説 正答：エ ア：外用消炎鎮痛薬を含め、同種成分の重複に注意が必要である。 イ：同じ解熱鎮痛成分が使われることがあり、重複に注意する。 ウ：製品数が増えると成分重複や副作用のリスクが高まり得る。 エ：一般用解熱鎮痛薬は他の解熱鎮痛薬、かぜ薬、鎮静薬、外用消炎鎮痛薬等との併用で同じ成分又は同種作用が重複し得るため、成分確認が必要である。 総合：一般用解熱鎮痛薬は他の解熱鎮痛薬、かぜ薬、鎮静薬、外用消炎鎮痛薬等との併用で同じ成分又は同種作用が重複し得るため、成分確認が必要である。

0029 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を促す薬] 難易度：基礎	
抗ヒスタミン成分を主薬とする一般用の睡眠改善薬の対象として、適切なのはどれか。 ア ストレスや疲労などによる一時的な寝つきの悪さや眠りの浅さがある人 イ 医療機関で不眠症と診断され、継続治療中の人 ウ 数か月以上ほぼ毎晩不眠が続いている人 エ 妊娠に伴う睡眠障害がある妊婦	答え・解説 正答：ア ア：一般用の睡眠改善薬は一時的な睡眠障害の緩和に用いるもので、慢性不眠や医療機関で不眠症と診断された人を対象としない。 イ：治療中の不眠症に自己判断で一般用睡眠改善薬を追加するのは適切でない。 ウ：慢性的な不眠では原因疾患の評価を含め医療機関受診が必要である。 エ：妊娠中の睡眠障害は睡眠改善薬の適用対象ではなく、使用を避ける。 総合：一般用の睡眠改善薬は一時的な睡眠障害の緩和に用いるもので、慢性不眠や医療機関で不眠症と診断された人を対象としない。

0030 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を促す薬] 難易度：基礎	
ジフェンヒドラミン塩酸塩が睡眠改善薬に用いられる理由として、適切なのはどれか。 ア カフェインと同様に脳を興奮させ、覚醒を維持するため イ 脳内のヒスタミン刺激を低下させる中枢作用が比較的強く、眠気を促すため ウ プロスタグランジン産生を抑えて解熱するため エ 気管支を拡張して呼吸を楽にするため	答え・解説 正答：イ ア：ジフェンヒドラミンは覚醒を促すのではなく、眠気を促す。 イ：脳内ヒスタミンは覚醒の維持に関与する。ジフェンヒドラミンは抗ヒスタミン成分の中でも中枢作用が強く、ヒスタミン刺激を低下させて眠気を促す。 ウ：主目的は抗ヒスタミン作用による睡眠改善であり、解熱薬ではない。 エ：気管支拡張を主目的とする成分ではない。 総合：脳内ヒスタミンは覚醒の維持に関与する。ジフェンヒドラミンは抗ヒスタミン成分の中でも中枢作用が強く、ヒスタミン刺激を低下させて眠気を促す。

0031 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を促す薬] 難易度：基礎	
抗ヒスタミン成分を含む睡眠改善薬を15歳未満の小児に使用しない主な理由として、適切なものはどれか。 ア 小児では必ず胃出血を起こすため イ 15歳未満では睡眠そのものが生理的に不要だから ウ 眠気とは反対に神経過敏や中枢興奮などが現れやすいため エ 小児では薬が全く吸収されないため	答え・解説 正答：ウ ア：主な理由は抗ヒスタミン成分による逆説的な神経過敏・中枢興奮の出現である。 イ：小児にも睡眠は重要であり、薬の副作用リスクが理由である。 ウ：小児・若年者では抗ヒスタミン成分で逆に神経過敏や中枢興奮が起こることがあり、特に15歳未満では使用を避ける。 エ：吸収されないのではなく、反応の違いと副作用が問題となる。 総合：小児・若年者では抗ヒスタミン成分で逆に神経過敏や中枢興奮が起こることがあり、特に15歳未満では使用を避ける。
0032 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を促す薬] 難易度：標準	
ジフェンヒドラミンを含む睡眠改善薬を就寝前に服用し、翌朝も眠気とぼんやり感が残っている人への助言として最も適切なものはどれか。 ア コーヒーを飲めば必ず安全に運転できる。 イ 服用から6時間経過すれば症状の有無にかかわらず運転してよい。 ウ 睡眠改善薬は就寝中しか作用しないので翌朝への影響はない。 エ 症状が消失するまで自動車の運転や危険を伴う機械操作を避ける。	答え・解説 正答：エ ア：カフェインで安全性が保証されるわけではなく、症状が消えるまで運転を避ける。 イ：時間だけでなく実際の眠気や注意力低下の有無で判断する。 ウ：翌朝まで作用が残ることがある。 エ：睡眠改善薬は覚醒後にも注意力・判断力低下、寝ぼけ様症状、めまい、倦怠感が残ることがあるため、残存症状がある間は運転等を避ける。 総合：睡眠改善薬は覚醒後にも注意力・判断力低下、寝ぼけ様症状、めまい、倦怠感が残ることがあるため、残存症状がある間は運転等を避ける。

0033 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を促す薬] 難易度：標準	
寝酒をした後に、ジフェンヒドラミン又はプロモバレリル尿素を含む催眠鎮静薬を服用しようとしている人への説明として、適切なのはどれか。 ア 薬効や副作用が増強されるおそれがあるため、飲酒と併用しない。 イ アルコールが薬を無効化するだけなので安全上の問題はない。 ウ 寝酒は睡眠の質を高めるため、催眠鎮静薬との併用が推奨される。 エ 生薬以外の催眠鎮静薬では飲酒に関する注意は不要である。	答え・解説 正答：ア ア：アルコールとジフェンヒドラミン、プロモバレリル尿素、アリルイソプロピルアセチル尿素等を併用すると鎮静作用や副作用が強く現れるおそれがある。 イ：無効化ではなく鎮静作用等の増強が問題となる。 ウ：アルコールは睡眠の質を低下させることがあり、併用は避ける。 エ：むしろジフェンヒドラミン等では飲酒による作用増強に注意が必要である。 総合：アルコールとジフェンヒドラミン、プロモバレリル尿素、アリルイソプロピルアセチル尿素等を併用すると鎮静作用や副作用が強く現れるおそれがある。

0034 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を促す薬] 難易度：標準	
妊娠中に寝つきが悪くなった人が一般用睡眠改善薬を希望した。最も適切なのはどれか。 ア 妊娠中は薬の影響を受けにくいので通常量を勧める。 イ 妊娠に伴う睡眠障害は適用対象ではないため、睡眠改善薬の使用を避ける。 ウ 妊娠中の不眠は必ず精神疾患なので、一般用薬を長期使用する。 エ 妊娠週数を問わず、成人なら15歳未満の注意は関係ないので使用できる。	答え・解説 正答：イ ア：妊婦には睡眠改善薬の使用を避ける。 イ：妊娠中の睡眠障害はホルモンバランスや体型変化などが原因となることがあり、一般用睡眠改善薬の適用対象ではない。 ウ：原因は多様であり、一般用睡眠改善薬の長期自己使用は適切でない。 エ：年齢とは別に妊娠自体が使用回避の理由となる。 総合：妊娠中の睡眠障害はホルモンバランスや体型変化などが原因となることがあり、一般用睡眠改善薬の適用対象ではない。

0035 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を促す薬] 難易度：標準	
入眠障害と早朝覚醒が数か月続き、日中の生活にも支障がある人への対応として最も適切なものはどれか。 ア 一般用睡眠改善薬を無期限に連用すればよい。 イ 慢性不眠でも原因疾患は考えなくてよい。 ウ 精神神経疾患や身体疾患などの可能性もあるため、医療機関の受診を勧める。 エ 睡眠時間を減らして眠気を強くすればよい。	答え・解説 正答：ウ ア：一般用睡眠改善薬は一時的な不眠に用いるもので、慢性不眠では受診が必要である。 イ：精神神経疾患や身体疾患などの評価が必要である。 ウ：慢性的な入眠障害・熟眠障害・中途覚醒・早朝覚醒は、うつ病等や身体疾患、薬の使いすぎなどが原因のことがあり、一般用薬で漫然と対処しない。 エ：睡眠不足を悪化させる対応であり、適切ではない。 総合：慢性的な入眠障害・熟眠障害・中途覚醒・早朝覚醒は、うつ病等や身体疾患、薬の使いすぎなどが原因のことがあり、一般用薬で漫然と対処しない。
0036 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を促す薬] 難易度：応用	
プロモバレリル尿素を含む製品を反復して大量に使用しており、呼びかけへの反応が鈍く呼吸も浅い人がある。最も適切なものはどれか。 ア 自宅で眠らせておけば自然に回復するので受診不要である。 イ 依存は本人の意志だけで必ず離脱できるため専門治療は不要である。 ウ カフェインを大量に飲ませて打ち消すのが標準的な応急処置である。 エ 過量摂取による昏睡・呼吸抑制を疑い、救命救急が可能な医療機関へつなぐ。	答え・解説 正答：エ ア：昏睡・呼吸抑制は重篤であり、救命救急対応が必要である。 イ：薬物依存は自己努力だけでは離脱が困難なことがあり、医療機関での診療が必要である。 ウ：自己判断でカフェインを大量投与するのは危険で、専門家・救急医療につなぐべきである。 エ：プロモバレリル尿素等は反復摂取で依存を形成し得る。大量摂取で昏睡や呼吸抑制がある場合は高度な専門対応が必要で、直ちに救急医療につなぐ。 総合：プロモバレリル尿素等は反復摂取で依存を形成し得る。大量摂取で昏睡や呼吸抑制がある場合は高度な専門対応が必要で、直ちに救急医療につなぐ。

0037 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を防ぐ薬] 難易度：基礎	
一般用の眠気防止薬の主な目的として、適切なのはどれか。 ア カフェイン等により一時的に眠気や倦怠感を抑える。 イ 睡眠不足そのものを解消し、睡眠を不要にする。 ウ 慢性的な過眠症を自己治療する。 エ 感染症時の生体防御反応としての眠気を積極的に消す。	答え・解説 正答：ア ア：眠気防止薬は、カフェイン等で脳を軽く興奮させ、一時的に眠気や倦怠感を除く目的で用いられる。疲労そのものを治す薬ではない。 イ：眠気を一時的に抑えるだけで、睡眠不足や疲労を解消するものではない。 ウ：持続する強い眠気では原因疾患を考え、受診が必要である。 エ：感染時の眠気を抑えると治癒を遅らせるおそれがある。 総合：眠気防止薬は、カフェイン等で脳を軽く興奮させ、一時的に眠気や倦怠感を除く目的で用いられる。疲労そのものを治す薬ではない。

0038 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を防ぐ薬] 難易度：基礎	
カフェインの作用・副作用について、適切なのはどれか。 ア 中枢神経を鎮静し、眠気を強めるのが主作用である。 イ 過剰な中枢興奮で振戦、不安、不眠、頭痛等が生じることがあり、利尿作用も示す。 ウ 腎臓で水分再吸収を促進して尿量を減らす。 エ 反復摂取しても依存形成は起こらない。	答え・解説 正答：イ ア：カフェインは中枢を軽く興奮させ、眠気を抑える。 イ：カフェインは脳を興奮させ、過量では振戦、めまい、不安、不眠、頭痛等が生じ得る。また腎でナトリウムと水の再吸収を抑え、尿量を増加させる。 ウ：再吸収を抑制し、利尿をもたらす。 エ：作用は弱いものの反復摂取で依存を形成する性質がある。 総合：カフェインは脳を興奮させ、過量では振戦、めまい、不安、不眠、頭痛等が生じ得る。また腎でナトリウムと水の再吸収を抑え、尿量を増加させる。

0039 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を防ぐ薬] 難易度：標準	
胃潰瘍と心臓病の既往がある人が眠気防止薬を希望した。最も適切なのはどれか。 ア カフェインは胃酸を抑え心拍を遅くするため積極的に勧める。 イ 既往歴は関係なく、眠気の強さだけで選べばよい。 ウ カフェインは胃液分泌亢進や心筋興奮を起こすため、使用を避ける。 エ 眠気防止薬は外用薬なので胃や心臓には影響しない。	答え・解説 正答：ウ ア：実際には胃液分泌亢進や動悸を起こし得る。 イ：基礎疾患は安全使用上の重要な確認事項である。 ウ：カフェインには胃液分泌亢進作用と心筋興奮作用があり、胃酸過多・胃潰瘍・心臓病がある人では服用を避ける。 エ：一般用眠気防止薬は主にカフェインを含む内服薬で、全身作用を示す。 総合：カフェインには胃液分泌亢進作用と心筋興奮作用があり、胃酸過多・胃潰瘍・心臓病がある人では服用を避ける。
0040 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を防ぐ薬] 難易度：標準	
眠気防止薬を使う人が、同時にコーヒー、かぜ薬、滋養強壮保健薬も摂取している。最も適切な説明はどれか。 ア 食品のカフェインは医薬品の総摂取量に含めなくてよい。 イ カフェインは複数経路から摂るほど副作用が減る。 ウ かぜ薬による眠気は眠気防止薬を追加して打ち消すのが適切である。 エ 複数の医薬品や食品からカフェインが重複し、過量になるおそれがあるため総摂取量を確認する。	答え・解説 正答：エ ア：食品由来も含め総摂取量を考える必要がある。 イ：重複摂取により中枢・循環器への作用が強くなるおそれがある。 ウ：薬による眠気を眠気防止薬で打ち消すのは適切でなく、眠気を催さない製品選択を検討する。 エ：カフェインは眠気防止薬だけでなく、かぜ薬、解熱鎮痛薬、乗物酔い防止薬、滋養強壮保健薬、コーヒー・茶などにも含まれるため、総摂取量に注意する。 総合：カフェインは眠気防止薬だけでなく、かぜ薬、解熱鎮痛薬、乗物酔い防止薬、滋養強壮保健薬、コーヒー・茶などにも含まれるため、総摂取量に注意する。

0041 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を防ぐ薬] 難易度：標準	
眠気防止薬におけるカフェインの摂取上限として、手引きの記載に合うのはどれか。 ア カフェインとして1回200mgまで、1日500mgまでとし、他のカフェイン含有物との重複にも注意する。 イ 1回50mg・1日100mgが一律の上限であり、食品に含まれるカフェイン量は考慮しなくてよい。 ウ 1回500mg・1日2,000mgまでなら、眠気が残る限り連用してよい。 エ 摂取上限は定められておらず、眠気が残る限り追加できる。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。眠気防止薬ではカフェインとして1回200mg、1日500mgが上限とされ、食品や他の医薬品に含まれるカフェインとの重複にも注意する。 イ：誤り。手引きの上限とは一致せず、食品等から摂取するカフェインも含めて重複に注意する必要がある。 ウ：誤り。手引きの上限を大きく超え、連用・過量摂取は副作用や依存のリスクを高める。 エ：誤り。摂取上限が示されており、眠気が残ることを理由に追加摂取してよいわけではない。 総合：眠気防止薬では、カフェインとして1回200mg、1日500mgが上限とされている。食品や他の医薬品に含まれるカフェインも重複に注意する。
0042 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [眠気を防ぐ薬] 難易度：応用	
十分な睡眠を取っているのに日中の耐え難い眠気が続き、眠気防止薬でも抑えられない人への対応として最も適切なのはどれか。 ア 眠気防止薬の量を増やし続け、受診は不要である。 イ 睡眠時無呼吸症候群やナルコレプシー等も考え、医療機関受診を勧める。 ウ 睡眠不足ではないなら病気の可能性はない。 エ 感染症時の眠気も同様に眠気防止薬で抑えるほど治癒が早まる。	答え・解説 正答：イ ア：持続する強い眠気は自己治療範囲を超える可能性がある。 イ：十分な睡眠後も強い眠気が続く場合は、神経・心臓・肺・肝臓の疾患、睡眠時無呼吸症候群、うつ病、ナルコレプシー等の可能性があり受診が必要である。 ウ：十分な睡眠があっても過度の眠気を来す疾患がある。 エ：感染時の眠気は生体防御反応の一部で、睡眠を妨げると治癒を遅らせるおそれがある。 総合：十分な睡眠後も強い眠気が続く場合は、神経・心臓・肺・肝臓の疾患、睡眠時無呼吸症候群、うつ病、ナルコレプシー等の可能性があり受診が必要である。

0043 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [乗物酔い防止薬] 難易度：基礎	
乗物酔い防止薬について、適切なのはどれか。 ア カフェインが少量でも入っていれば、他成分の眠気は完全に打ち消される。 イ 乗物酔い防止薬は運転者が運転中に服用することを主目的とする。 ウ 抗めまい成分、抗ヒスタミン成分、抗コリン成分、鎮静成分などは眠気を促すことがあり、服用後の運転は避ける。 エ 抗コリン成分は散瞳を起こさない。	答え・解説 正答：ウ ア：カフェインが配合されていても、抗ヒスタミン・抗コリン・鎮静成分等による眠気が解消されるとは限らない。 イ：眠気や視覚障害が起こり得るため運転者の服用は適切でない。 ウ：乗物酔い防止薬の主要成分には眠気を生じさせるものがあり、抗コリン成分では目のかすみ・まぶしさも起こり得るため、運転操作を避ける。 エ：抗コリン作用により散瞳し、目のかすみや異常なまぶしさが生じることがある。 総合：乗物酔い防止薬の主要成分には眠気を生じさせるものがあり、抗コリン成分では目のかすみ・まぶしさも起こり得るため、運転操作を避ける。
0044 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [乗物酔い防止薬] 難易度：基礎	
ジフェニドール塩酸塩について、適切なのはどれか。 ア 主にプロスタグランジン産生を抑える解熱鎮痛成分である。 イ 咳嗽中枢を抑えて咳を止める麻薬性成分である。 ウ 副作用として排尿困難や異常なまぶしさは起こらない。 エ 内耳の前庭と脳を結ぶ神経の調節や内耳血流の改善により、抗めまい作用を示す。	答え・解説 正答：エ ア：解熱鎮痛成分ではなく、抗めまい成分である。 イ：鎮咳成分ではない。 ウ：抗ヒスタミン・抗コリン成分に類似した副作用として排尿困難、異常なまぶしさ等が現れることがある。 エ：ジフェニドールは前庭神経の調節作用と内耳血流改善作用を持ち、日本では専ら抗めまい成分として用いられる。 総合：ジフェニドールは前庭神経の調節作用と内耳血流改善作用を持ち、日本では専ら抗めまい成分として用いられる。

0045 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [乗物酔い防止薬] 難易度：標準	
乗物酔い防止薬に用いられるメクリジン塩酸塩の特徴として、適切なのはどれか。 ア 他の抗ヒスタミン成分と比べて作用の発現が遅く、持続時間が長い。 イ 作用の発現が非常に速いが、数分で消失する。 ウ 抗ヒスタミン作用を持たず、解熱作用だけを示す。 エ 乗物酔いには用いず、専ら皮膚外用薬に用いる。	答え・解説 正答：ア ア：メクリジン塩酸塩は専ら乗物酔い防止薬に配合され、他の抗ヒスタミン成分より作用発現が遅く持続が長いとされる。 イ：手引きでは発現が遅く持続が長いとされる。 ウ：メクリジンは抗ヒスタミン成分である。 エ：専ら乗物酔い防止薬に配合される。 総合：メクリジン塩酸塩は専ら乗物酔い防止薬に配合され、他の抗ヒスタミン成分より作用発現が遅く持続が長いとされる。
0046 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [乗物酔い防止薬] 難易度：標準	
スコボラミン臭化水素酸塩水和物について、適切なのはどれか。 ア 血液脳関門を通過しにくく、中枢作用はない。 イ 脳内に移行しやすい抗コリン成分だが、肝臓で速やかに代謝されるため作用持続は比較的短い。 ウ 代謝されにくいため数日間作用が持続する。 エ 抗コリン作用ではなく、プロスタグランジン抑制が主作用である。	答え・解説 正答：イ ア：他の抗コリン成分より脳内へ移行しやすいとされる。 イ：スコボラミンは消化管からよく吸収され脳内へ移行しやすい一方、肝臓で速やかに代謝されるため抗ヒスタミン成分等より持続時間が短い。 ウ：肝臓で速やかに代謝され、持続は比較的短い。 エ：乗物酔いでは抗コリン作用が利用される。 総合：スコボラミンは消化管からよく吸収され脳内へ移行しやすい一方、肝臓で速やかに代謝されるため抗ヒスタミン成分等より持続時間が短い。

0047 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [乗物酔い防止薬] 難易度：標準	
10歳児の乗物酔いにプロメタジンを含む製品を使いたいという相談への対応として、最も適切なのはどれか。 ア 10歳以上なら成人と同様に安全なので使用できる。 イ 年齢制限は3歳未満だけである。 ウ 15歳未満では致命的な呼吸抑制の報告があるため、使用を避ける。 エ 主な問題は虫歯だけなので、呼吸への影響はない。	答え・解説 正答：ウ ア：15歳未満では使用を避ける必要がある。 イ：プロメタジンについては15歳未満での使用回避が重要である。 ウ：プロメタジンを含む成分は、海外で乳児突然死症候群や乳児睡眠時無呼吸発作のような致命的呼吸抑制の報告があり、15歳未満では使用を避ける。 エ：重篤な呼吸抑制が問題となる。 総合：プロメタジンを含む成分は、海外で乳児突然死症候群や乳児睡眠時無呼吸発作のような致命的呼吸抑制の報告があり、15歳未満では使用を避ける。
0048 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [乗物酔い防止薬] 難易度：標準	
妊婦が「つわりの吐きけを抑えたい」と乗物酔い防止薬を求めた。最も適切なのはどれか。 ア 吐きけなら原因を問わず同じ薬を使用できる。 イ 妊娠中は乗物酔い防止薬の作用が消失するため、倍量必要である。 ウ 乗物酔い防止薬は妊娠悪阻の治療薬として一般用に販売されている。 エ 乗物酔いに伴う吐きけへの薬であり、つわりへの対処として使用するのは適切でない。	答え・解説 正答：エ ア：吐きけの原因により対応は異なり、つわりへの流用は適切でない。 イ：用法用量を超える使用は危険であり、つわり目的にも用いない。 ウ：一般用乗物酔い防止薬は妊娠悪阻治療を目的としない。 エ：乗物酔い防止薬に制吐目的の成分が含まれていても、つわりに伴う吐きけへ自己判断で用いるのは適切でない。 総合：乗物酔い防止薬に制吐目的の成分が含まれていても、つわりに伴う吐きけへ自己判断で用いるのは適切でない。

0049 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [乗物酔い防止薬] 難易度：応用	
2歳児が飛行機内で機嫌が悪く泣いているため、保護者が乗物酔い防止薬を希望した。最も適切なのはどれか。 ア 3歳未満では乗物酔いはほとんど起こらず対象製品もないため、耳の痛みなど他の原因を考える。 イ 3歳未満ほど乗物酔いが多いので、成人用製品を少量使う。 ウ 不機嫌の原因は必ず乗物酔いなので、他の原因を考える必要はない。 エ 乳幼児では薬の副作用が起こらないため用量は自由に決められる。	答え・解説 正答：ア ア：3歳未満では乗物酔いはほとんど起こらないとされ、乳幼児向け製品もない。気圧変化による耳痛等の他要因を考え、安易に使用しない。 イ：3歳未満では乗物酔いはほとんどなく、成人用の転用も不適切である。 ウ：耳痛など他の原因も考慮する必要がある。 エ：乳幼児は薬の影響を受けやすく、用法用量の厳守が必要である。 総合：3歳未満では乗物酔いはほとんど起こらないとされ、乳幼児向け製品もない。気圧変化による耳痛等の他要因を考え、安易に使用しない。
0050 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [乗物酔い防止薬] 難易度：応用	
乗物に乗っていない日常生活でもめまいを繰り返し、耳鳴りもある高齢者への対応として最も適切なのはどれか。 ア 乗物酔い防止薬を毎日予防的に長期使用する。 イ 乗物酔いとして自己治療せず、医療機関受診を勧める。 ウ 耳鳴りはめまいと無関係なので情報として確認しない。 エ 立ちくらみと平衡機能障害によるめまいは必ず同じ原因である。	答え・解説 正答：イ ア：反復する日常的めまいは原因評価が必要で、長期自己使用は適切でない。 イ：乗物酔いに伴う一時的症状ではなく日常的にめまいが反復する場合は受診が基本で、高齢者では平衡機能低下や聴覚障害との関連も考えられる。 ウ：高齢者では難聴・耳鳴りとともにめまいが現れることもある。 エ：低血圧等によるふらつきと平衡機能障害によるめまいは区別する必要がある。 総合：乗物酔いに伴う一時的症状ではなく日常的にめまいが反復する場合は受診が基本で、高齢者では平衡機能低下や聴覚障害との関連も考えられる。

0051 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [小児鎮静薬] 難易度：基礎	
身体的な問題がない小児の夜泣きや疳の虫について、適切なのはどれか。 ア 必ず重篤な神経疾患が原因であり、自然に治まることはない。 イ 保護者の睡眠確保を最優先に、症状がなくても小児鎮静薬を使用する。 ウ 発達過程や情緒不安定などが関係し、成長に伴って自然に治まることも多い。 エ 夜泣きは消化管の状態とは一切関係しない。	答え・解説 正答：ウ ア：身体的問題がない場合は発達過程の一時的症状であることも多い。 イ：保護者側の安眠を優先した使用は適切でない。 ウ：小児の夜泣き、ひきつけ、疳の虫等は、情緒不安定や睡眠リズム形成など発達の一過程として現れ、成長に伴い自然に治まることが多い。 エ：げっぷ不足や胃食道逆流などがむずがり・夜泣きに関連することもある。 総合：小児の夜泣き、ひきつけ、疳の虫等は、情緒不安定や睡眠リズム形成など発達の一過程として現れ、成長に伴い自然に治まることが多い。
0052 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [小児鎮静薬] 難易度：基礎	
小児鎮静薬の説明として、適切なのはどれか。 ア 抗菌薬を主成分として感染症を治療する薬である。 イ 麻薬性鎮咳成分を主成分として咳だけを抑える薬である。 ウ 成人の慢性不眠だけを対象とする薬である。 エ 夜泣きや疳の虫等を鎮めるほか、虚弱体質や消化不良などの改善を目的とする生薬・漢方製剤がある。	答え・解説 正答：エ ア：主に生薬・漢方処方製剤で、感染症治療を目的とする抗菌薬ではない。 イ：小児の疳や夜泣き等を対象とする薬であり、鎮咳薬とは異なる。 ウ：小児の症状を対象とする。 エ：小児鎮静薬は、夜泣き、ひきつけ、疳の虫等の症状を鎮めるほか、小児の虚弱体質や消化不良の改善を目的とする生薬製剤・漢方処方製剤である。 総合：小児鎮静薬は、夜泣き、ひきつけ、疳の虫等の症状を鎮めるほか、小児の虚弱体質や消化不良の改善を目的とする生薬製剤・漢方処方製剤である。

0053 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [小児鎮静薬] 難易度：標準	
生後2か月の乳児に、適用年齢の下限が明示されていない小児向け漢方処方製剤を使いたいという相談への対応として、適切なのはどれか。 ア 用法用量に年齢下限がなくても、生後3か月未満の乳児には使用しない。 イ 年齢下限の記載がなければ新生児から自由に使用できる。 ウ 体重が大きければ生後1か月でも成人量を使える。 エ 生薬製剤は副作用がないので乳児ほど安全である。	答え・解説 正答：ア ア：漢方処方製剤は、用法用量に適用年齢の下限が設定されていない場合でも、生後3か月未満の乳児には使用しないとされる。 イ：生後3か月未満には使用しない。 ウ：月齢上の使用制限があり、成人量の転用も不適切である。 エ：生薬でも副作用や相互作用があり、安易な使用は避ける。 総合：漢方処方製剤は、用法用量に適用年齢の下限が設定されていない場合でも、生後3か月未満の乳児には使用しないとされる。

0054 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [小児鎮静薬] 難易度：標準	
カンゾウを含む小児鎮静薬について、適切なのはどれか。 ア 小児では偽アルドステロン症が起こらないため総量確認は不要である。 イ 他の医薬品や食品からのグリチルリチン酸も含め、総摂取量が継続して多くならないよう注意する。 ウ 食品由来のグリチルリチン酸は完全に別物なので考慮しない。 エ カンゾウは必ず鎮咳成分としてのみ配合され、健胃目的では使われない。	答え・解説 正答：イ ア：年齢にかかわらず過剰摂取には注意が必要である。 イ：小児鎮静薬中のカンゾウ量が少なくても、他の医薬品等からのグリチルリチン酸を含めた総量に注意する必要がある。乳幼児では体重当たり摂取量が多くなることにも留意する。 ウ：総摂取量として考慮する。 エ：小児の疳を適応症とする製剤では健胃作用を期待して用いられることもある。 総合：小児鎮静薬中のカンゾウ量が少なくても、他の医薬品等からのグリチルリチン酸を含めた総量に注意する必要がある。乳幼児では体重当たり摂取量が多くなることにも留意する。

0055 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [小児鎮静薬] 難易度：標準	
小児の夜泣きに漢方処方製剤を1週間ほど用いたが改善がない。最も適切な対応はどれか。 ア 効果が出るまで用量を毎週倍にする。 イ 改善がなくても数年間漫然と続ける。 ウ いったん服用を中止し、専門家に相談して処方が適しているか見直す。 エ 夜泣きは必ず薬で止める必要があり、中止してはいけない。	答え・解説 正答：ウ ア：用法用量を超えて増量するのは不適切である。 イ：一定期間で改善がない場合は使用適否を見直す。 ウ：小児の夜泣きに用いる柴胡加竜骨牡蛎湯、桂枝加竜骨牡蛎湯、抑肝散、抑肝散加陳皮半夏などは、1週間位で改善がないときは中止して専門家に相談するなど見直しが必要である。 エ：発達過程の一時的症状も多く、漫然と薬を続けるべきではない。 総合：小児の夜泣きに用いる柴胡加竜骨牡蛎湯、桂枝加竜骨牡蛎湯、抑肝散、抑肝散加陳皮半夏などは、1週間位で改善がないときは中止して専門家に相談するなど見直しが必要である。
0056 [睡眠・覚醒・乗物酔い等] > [小児鎮静薬] 難易度：応用	
小児鎮静薬を使用している乳児に、激しい下痢と高熱があり、緑色の嘔吐もみられた。最も適切な対応はどれか。 ア 小児鎮静薬の一般的な効き始めの反応なので、そのまま継続する。 イ 緑色の嘔吐は正常なので観察不要である。 ウ 乳幼児は脱水しにくいので高熱と下痢があっても受診不要である。 エ 脱水や他疾患を疑い、漫然と薬を続けず早めに医師の診療を受けさせる。	答え・解説 正答：エ ア：危険症状であり、薬の継続より受診が優先される。 イ：胆汁混入を示すことがあり、早めの診療が必要である。 ウ：乳幼児では脱水につながりやすく、注意が必要である。 エ：乳幼児は急変しやすい。激しい下痢・高熱は脱水の危険があり、緑色（胆汁混入）や血性の嘔吐、呼吸を詰まらせるような嘔吐は早期受診が必要である。 総合：乳幼児は急変しやすい。激しい下痢・高熱は脱水の危険があり、緑色（胆汁混入）や血性の嘔吐、呼吸を詰まらせるような嘔吐は早期受診が必要である。

0057 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：基礎	
咳が起こる仕組みについて、適切なのはどれか。 ア 気道への刺激が中枢神経系へ伝わり、延髄の咳嗽中枢の働きによって反射的に起こる。 イ 咳はすべて意識的な運動であり、中枢神経系は関与しない。 ウ 咳は有害な反応なので、どのような場合も完全に抑えるべきである。 エ 咳は胃の蠕動だけで生じる。	答え・解説 正答：ア ア：咳は異物や刺激を排除する防御反射で、気管・気管支の刺激が中枢へ伝わり、延髄の咳嗽中枢を介して起こる。 イ：咳は反射的に生じ、延髄の咳嗽中枢が関与する。 ウ：咳は異物や痰を排除する防御反応でもあり、むやみに抑え込むべきではない。 エ：主に気道刺激と咳嗽中枢が関与する。 総合：咳は異物や刺激を排除する防御反射で、気管・気管支の刺激が中枢へ伝わり、延髄の咳嗽中枢を介して起こる。
0058 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：基礎	
痰について、適切なのはどれか。 ア 痰は血液だけから作られ、気道粘液とは無関係である。 イ 気道粘液に異物や粘膜上皮細胞の残骸などが混じったもので、滞留すると呼吸を妨げる。 ウ 痰は呼吸を助けるため、気道内に長く留めるほどよい。 エ 感染時でも気道粘液の分泌は減少するのが通常である。	答え・解説 正答：イ ア：痰は気道粘液に異物や細胞残骸等が混じったものである。 イ：感染や汚染環境、喫煙などで気道粘液が増え、異物や細胞残骸が混じって痰となる。痰が滞留すると咳反射で排出しようとする。 ウ：滞留すると呼吸を妨げるため排出が必要である。 エ：感染等では粘液分泌が増えることがある。 総合：感染や汚染環境、喫煙などで気道粘液が増え、異物や細胞残骸が混じって痰となる。痰が滞留すると咳反射で排出しようとする。

0059 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：基礎	
一般的な鎮咳去痰薬に配合される成分の組合せとして、適切なのはどれか。 ア 解熱成分だけを必ず単独配合する。 イ 利尿成分だけで痰を排泄する。 ウ 咳を鎮める成分、気管支を拡げる成分、痰の切れを良くする成分、気道の炎症を和らげる成分 エ 抗菌薬だけを配合し、咳反射を直接止めない。	答え・解説 正答：ウ ア：鎮咳去痰薬に解熱成分は通常配合されず、咳・痰等への作用成分が中心である。 イ：痰は尿として排泄するのではなく、気道から排出しやすくする。 ウ：鎮咳去痰薬は、鎮咳、気管支拡張、去痰、抗炎症など目的の異なる成分を組み合わせていることが多い。 エ：一般用鎮咳去痰薬は抗菌薬を主成分とする薬ではない。 総合：鎮咳去痰薬は、鎮咳、気管支拡張、去痰、抗炎症など目的の異なる成分を組み合わせていることが多い。
0060 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：基礎	
延髄の咳嗽中枢に作用して咳を抑える成分として、適切なのはどれか。 ア セチルピリジニウム塩化物 イ アズレンスルホン酸ナトリウム ウ ブロムヘキシン塩酸塩 エ デキストロメトルファン臭化水素酸塩水和物	答え・解説 正答：エ ア：口腔・咽頭で用いられる殺菌消毒成分である。 イ：粘膜組織の修復を促す目的等で口腔咽喉薬に用いられる。 ウ：主に去痰成分であり、中枢性鎮咳成分ではない。 エ：デキストロメトルファンは中枢性鎮咳成分の一つで、咳嗽中枢に作用して咳を抑える。 総合：デキストロメトルファンは中枢性鎮咳成分の一つで、咳嗽中枢に作用して咳を抑える。

0061 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：標準	
鎮咳去痰薬を選ぶ際、コデインリン酸塩水和物又はジヒドロコデインリン酸塩について特に注意すべき性質はどれか。 ア モルヒネと同じ基本構造を持つ麻薬性鎮咳成分で、依存性に注意が必要である。 イ 依存性がないため、内服液剤で大量摂取しても問題ない。 ウ 気管支拡張だけを目的とし、咳嗽中枢には作用しない。 エ 一般用医薬品では年齢や用量に関する制限は一切ない。	答え・解説 正答：ア ア：コデイン、ジヒドロコデインは麻薬性鎮咳成分で依存性があり、長期連用や大量摂取は薬物依存につながるおそれがある。 イ：依存性があり、内服液剤では不適正使用にも注意が必要である。 ウ：中枢性鎮咳成分である。 エ：年齢制限や用法用量を含む安全上の注意がある。 総合：コデイン、ジヒドロコデインは麻薬性鎮咳成分で依存性があり、長期連用や大量摂取は薬物依存につながるおそれがある。
0062 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：標準	
メチルエフェドリン塩酸塩などのアドレナリン作動成分が鎮咳去痰薬に配合される主な目的はどれか。 ア 胃液分泌を抑えて胃痛を治す。 イ 交感神経系を刺激して気管支を拡張し、呼吸を楽にして咳や喘息症状を和らげる。 ウ 咽頭粘膜だけを殺菌する。 エ プロスタグランジン産生だけを抑えて解熱する。	答え・解説 正答：イ ア：主な目的は気管支拡張であり、胃薬ではない。 イ：メチルエフェドリン等は交感神経刺激により気管支を拡張する。心血管系や代謝にも作用し得るため基礎疾患に注意する。 ウ：殺菌消毒成分ではない。 エ：解熱鎮痛成分ではなく、交感神経刺激による気管支拡張が中心である。 総合：メチルエフェドリン等は交感神経刺激により気管支を拡張する。心血管系や代謝にも作用し得るため基礎疾患に注意する。

0063 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：標準	
高血圧と糖尿病の治療中の高齢者が、メチルエフェドリンを含む鎮咳去痰薬を希望した。最も適切なのはどれか。 ア 高齢者では交感神経への反応がなくなるため問題ない。 イ 高血圧には血圧を下げる作用があるため積極的に勤める。 ウ 血圧上昇や血糖値上昇などを招くおそれがあるため、使用前に医師又は薬剤師へ相談するよう案内する。 エ 糖尿病は鎮咳去痰薬の確認事項にならない。	答え・解説 正答：ウ ア：高齢者ではむしろ心悸亢進、血圧・血糖上昇等に注意が必要である。 イ：交感神経刺激で血圧上昇を招くおそれがある。 ウ：アドレナリン作動成分やマオウは心臓病、高血圧、糖尿病、甲状腺機能亢進症を悪化させるおそれがある。高齢者では基礎疾患が多いため慎重な使用が必要である。 エ：糖代謝への影響から重要な確認事項である。 総合：アドレナリン作動成分やマオウは心臓病、高血圧、糖尿病、甲状腺機能亢進症を悪化させるおそれがある。高齢者では基礎疾患が多いため慎重な使用が必要である。
0064 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：応用	
鎮咳去痰薬に配合される生薬マオウに期待される作用と注意点の組合せとして、正しいものはどれか。 ア 鎮静作用だけを示し、心血管系には影響しない。 イ 偽アルドステロン症だけが問題で、依存性はない。 ウ 糖尿病や甲状腺機能亢進症の人ほど安全に使える。 エ 気管支拡張、発汗促進、利尿などが期待される一方、中枢刺激や依存性にも注意する。	答え・解説 正答：エ ア：交感神経刺激により心血管系にも影響し得る。 イ：依存性がある成分としても注意される。 ウ：症状を悪化させるおそれがあり、事前相談が必要である。 エ：マオウはアドレナリン作動成分に類似した作用を示し、気管支拡張のほか発汗・利尿等が期待される。中枢神経への作用が比較的強く、依存性にも注意する。 総合：マオウはアドレナリン作動成分に類似した作用を示し、気管支拡張のほか発汗・利尿等が期待される。中枢神経への作用が比較的強く、依存性にも注意する。

0065 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：標準 1日最大量が原生薬換算1g以上のカンゾウを含む鎮咳去痰薬の使用について、適切なのはどれか。 ア 1日最大量が原生薬換算1g以上となる製品では長期連用を避け、他製品・食品からの摂取も含め総量に注意する。 イ カンゾウは食品にも使われるため、医薬品での過量は問題にならない。 ウ むくみや高血圧のある人ほど積極的に使う。 エ 長期連用するほど副作用が減る。	答え・解説 正答：ア ア：カンゾウの大量摂取はグリチルリチン酸の過剰につながり偽アルドステロン症を起こし得る。1日最大1g以上の製品は長期連用を避ける。 イ：食品を含む総摂取量が多くならないよう注意が必要である。 ウ：偽アルドステロン症リスクが高く、慎重な判断が必要である。 エ：長期連用は避ける。 総合：カンゾウの大量摂取はグリチルリチン酸の過剰につながり偽アルドステロン症を起こし得る。1日最大1g以上の製品は長期連用を避ける。
0066 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：標準 痰が多く「痰を出しやすくしたい」という人に、抗ヒスタミン成分を含む鎮咳去痰薬を勧める際の注意として適切なのはどれか。 ア 抗ヒスタミン成分は必ず痰量を増やして排出を促進する。 イ 気道粘液分泌を抑えて痰が出にくくなることもあるため、配合の必要性を確認する。 ウ 抗ヒスタミン成分は鎮咳去痰薬には配合されない。 エ 痰の有無は製品選択に関係しない。	答え・解説 正答：イ ア：粘液分泌を抑え、痰が出にくくなることもある。 イ：抗ヒスタミン成分はアレルギー由来の咳等に補助的に使われるが、気道粘液分泌を抑えて痰の切れを悪くすることがある。 ウ：補助的に配合される場合がある。 エ：痰の性状・量は鎮咳去痰薬選択の重要な情報である。 総合：抗ヒスタミン成分はアレルギー由来の咳等に補助的に使われるが、気道粘液分泌を抑えて痰の切れを悪くすることがある。

0067 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：応用	
鎮咳去痰薬、かぜ薬、鼻炎用内服薬、睡眠改善薬を同時に使おうとしている人への対応として最も適切なのはどれか。 ア 薬効群が異なるので成分重複は起こらない。 イ 製品数が増えるほど副作用は分散して減る。 ウ 抗ヒスタミン成分やアドレナリン作動成分、鎮咳成分などの重複を確認し、安易な併用を避ける。 エ 鎮咳去痰薬は他の一般用医薬品と必ず併用する。	答え・解説 正答：ウ ア：鼻炎薬や睡眠改善薬等にも抗ヒスタミン成分など共通成分が含まれることがある。 イ：重複摂取により副作用が増えるおそれがある。 ウ：異なる薬効群でも同じ成分・同種作用の成分が重複し、作用や副作用が強くなることもあるため、併用前に成分確認が必要である。 エ：必要な成分だけを選び、不要な重複を避けるのが基本である。 総合：異なる薬効群でも同じ成分・同種作用の成分が重複し、作用や副作用が強くなることもあるため、併用前に成分確認が必要である。
0068 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：応用	
咳がひどく、痰に線状の血が混じり、黄色く濁った痰も出るという相談への対応として最も適切なのはどれか。 ア 痰の色や血液混入は鎮咳去痰薬の適否に関係しない。 イ 血痰があるほど咳を完全に止める薬を強く勧める。 ウ 1か月ほど市販薬を続けてから受診を考える。 エ 一般用鎮咳去痰薬だけで対処せず、早めに医療機関の受診を勧める。	答え・解説 正答：エ ア：重要な受診勧奨サインである。 イ：原因疾患の評価が必要であり、症状だけを抑えるべきではない。 ウ：早めの医療機関受診が望ましい。 エ：血の混じる痰や黄色・緑色の膿性痰を伴う場合は、一般用医薬品だけで自己治療せず、早めの受診が望ましい。 総合：血の混じる痰や黄色・緑色の膿性痰を伴う場合は、一般用医薬品だけで自己治療せず、早めの受診が望ましい。

0069 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：標準	
痰を伴わない乾いた咳が長く続いている人への対応として、適切なのはどれか。 ア 間質性肺炎などの初期症状や医薬品副作用の可能性も考え、受診を検討する。 イ 乾いた咳は必ず軽症なので、市販薬を無期限に使う。 ウ 痰がない咳は呼吸器疾患とは無関係である。 エ 原因薬が疑われても、その薬を続けながら鎮咳薬だけ追加する。	答え・解説 正答：ア ア：乾いた咳が続く場合は間質性肺炎等の初期症状の可能性があるため、薬剤性の場合もあるため、漫然と鎮咳薬だけで対処しない。 イ：重篤な疾患や副作用の初期症状である可能性がある。 ウ：間質性肺炎などでも乾性咳嗽がみられる。 エ：原因薬や病態の評価が必要である。 総合：乾いた咳が続く場合は間質性肺炎等の初期症状の可能性があるため、薬剤性の場合もあるため、漫然と鎮咳薬だけで対処しない。
0070 [呼吸器官に作用する薬] > [鎮咳去痰薬] 難易度：標準	
発熱と咳がある人が「鎮咳去痰薬を飲めば熱も下がるか」と質問した。適切な説明はどれか。 ア 鎮咳成分はすべて解熱作用を併せ持つ。 イ 鎮咳去痰薬には通常、解熱成分は配合されておらず、発熱を鎮める効果は期待できない。 ウ 咳が止まれば必ず体温も平熱に戻る。 エ 発熱の有無は鎮咳去痰薬の相談時に確認不要である。	答え・解説 正答：イ ア：鎮咳去痰薬に解熱作用は基本的に期待できない。 イ：鎮咳去痰薬は咳・痰・喘息症状等の緩和を目的とし、解熱成分は配合されていない。発熱を伴う場合は感染等も考え、必要に応じ受診判断を行う。 ウ：咳と発熱は別の機序で、鎮咳だけで解熱するとは限らない。 エ：発熱は感染症や受診動機判断の重要な情報である。 総合：鎮咳去痰薬は咳・痰・喘息症状等の緩和を目的とし、解熱成分は配合されていない。発熱を伴う場合は感染等も考え、必要に応じ受診判断を行う。

0071 [呼吸器官に作用する薬] > [口腔咽喉薬・うがい薬] 難易度：基礎	
口腔咽喉薬の主な目的として、適切なのはどれか。 ア 気管支を拡張して喘息発作を止めることだけを目的とする。 イ 全身の発熱を下げることを主目的とする。 ウ 口腔内又は咽頭部の粘膜に局所作用し、炎症による痛みや腫れ等を緩和する。 エ 胃酸を中和して胸やけを治す。	答え・解説 正答：ウ ア：気管支拡張成分を配合する製品は鎮咳去痰薬に分類される。 イ：主に局所作用を目的とする。 ウ：口腔咽喉薬は口腔・咽頭粘膜に局所的に作用し、痛み、腫れ、荒れ、不快感などの緩和や殺菌・消毒を目的とする。 エ：胃薬ではない。 総合：口腔咽喉薬は口腔・咽頭粘膜に局所的に作用し、痛み、腫れ、荒れ、不快感などの緩和や殺菌・消毒を目的とする。
0072 [呼吸器官に作用する薬] > [口腔咽喉薬・うがい薬] 難易度：基礎	
含嗽薬（うがい薬）について、適切なのはどれか。 ア 原液を必ず大量に飲み込んで全身作用を得る。 イ 主に腸内細菌を調整する整腸薬である。 ウ 用時希釈型でも濃度は自由で、濃いほど必ず効果が高い。 エ 口腔・咽頭の殺菌・消毒・洗浄や口臭除去などを目的に、用時希釈・溶解してうがいに用いる製品がある。	答え・解説 正答：エ ア：うがいに用いる外用液剤であり、飲用目的ではない。 イ：口腔・咽頭に用いる薬である。 ウ：濃すぎても薄すぎても十分な効果が得られないため、指定濃度で使用する。 エ：含嗽薬は口腔・咽頭の殺菌、消毒、洗浄、口臭除去等を目的とし、製品に応じて用時水で希釈・溶解して用いる。 総合：含嗽薬は口腔・咽頭の殺菌、消毒、洗浄、口臭除去等を目的とし、製品に応じて用時水で希釈・溶解して用いる。

0073 [呼吸器官に作用する薬] > [口腔咽喉薬・うがい薬] 難易度：基礎	
口腔咽喉用のトローチ剤・ドロップ剤の使用方法として、適切なのはどれか。 ア 口中で噛まずにゆっくり溶かし、有効成分を口腔・咽頭に行き渡らせる。 イ 噛み砕いてすぐ飲み込むほど局所効果が高まる。 ウ 必ず水に溶かしてうがいに使う。 エ 皮膚に貼って使用する。	答え・解説 正答：ア ア：トローチ・ドロップは局所作用を得るため、噛み砕いて飲み込まず口中でゆっくり溶かす。 イ：局所に行き渡る前に飲み込むと効果が期待しにくい。 ウ：トローチ・ドロップは口中で溶かして使用する。 エ：口腔・咽頭に用いる剤形である。 総合：トローチ・ドロップは局所作用を得るため、噛み砕いて飲み込まず口中でゆっくり溶かす。
0074 [呼吸器官に作用する薬] > [口腔咽喉薬・うがい薬] 難易度：標準	
噴射式の口腔咽喉薬を使用する際の説明として、最も適切なのはどれか。 ア 深く息を吸いながら噴射し、肺まで到達させる。 イ 軽く息を吐きながら噴射し、薬液が気管支や肺へ入りにくいようにする。 ウ 鼻から吸い込むほど咽頭への効果が高まる。 エ 噴射後は必ず薬液を大量に飲み込む。	答え・解説 正答：イ ア：口腔・咽頭への局所作用が目的で、気管支・肺への流入は避ける。 イ：息を吸いながら噴射すると薬液が気管支・肺に入るおそれがあるため、軽く息を吐きながら噴射するのが望ましい。 ウ：指定された口腔・咽頭への使用法を守る。 エ：飲用を目的とする製品ではない。 総合：息を吸いながら噴射すると薬液が気管支・肺に入るおそれがあるため、軽く息を吐きながら噴射するのが望ましい。

0075 [呼吸器官に作用する薬] > [口腔咽喉薬・うがい薬] 難易度：標準	
用時希釈型の含嗽薬を使う人への説明として、適切なのはどれか。 ア 濃度は濃いほどよく、原液使用が基本である。 イ 薄いほど粘膜刺激が減るため、無制限に薄めてよい。 ウ 指定濃度で調製し、うがい直後の食事は殺菌消毒効果を弱めることがあるため避ける。 エ 使用直後に飲食すると薬効が強くなる。	答え・解説 正答：ウ ア：指定の希釈・溶解方法を守る必要がある。 イ：薄すぎると十分な効果が得られない。 ウ：含嗽薬は濃すぎても薄すぎても効果が十分得られない。使用直後の食事は殺菌消毒効果を薄れさせやすい。 エ：直後の飲食は殺菌消毒効果を弱めやすい。 総合：含嗽薬は濃すぎても薄すぎても効果が十分得られない。使用直後の食事は殺菌消毒効果を薄れさせやすい。
0076 [呼吸器官に作用する薬] > [口腔咽喉薬・うがい薬] 難易度：標準	
口腔咽喉薬の成分について、適切なのはどれか。 ア アズレンスルホン酸ナトリウムは中枢性鎮咳成分である。 イ トラネキサム酸は殺菌消毒成分としてのみ使用される。 ウ グリチルリチン酸二カリウムは口腔咽喉薬には配合されない。 エ グリチルリチン酸二カリウムやトラネキサム酸は炎症を和らげ、アズレンスルホン酸ナトリウムは粘膜組織の修復を促す目的で配合されることがある。	答え・解説 正答：エ ア：主に炎症を生じた粘膜組織の修復促進を期待して用いられる。 イ：抗炎症目的で配合される。 ウ：炎症を和らげる目的で配合されることがある。 エ：口腔咽喉薬には抗炎症成分としてグリチルリチン酸二カリウム、トラネキサム酸等が用いられ、アズレンスルホン酸ナトリウムは粘膜修復促進を期待して用いられる。 総合：口腔咽喉薬には抗炎症成分としてグリチルリチン酸二カリウム、トラネキサム酸等が用いられ、アズレンスルホン酸ナトリウムは粘膜修復促進を期待して用いられる。

0077 [呼吸器官に作用する薬] > [口腔咽喉薬・うがい薬] 難易度：応用	
バセドウ病で治療中の妊婦が、ポビドンヨード含嗽薬を長期間使いたいと相談した。最も適切なのはどれか。 ア ヨウ素が甲状腺機能や胎児へ影響する可能性があるため、自己判断で長期使用せず医師又は薬剤師へ相談する。 イ ヨウ素は甲状腺と無関係なので、バセドウ病でも無制限に使用できる。 ウ 妊娠中は胎盤を通過しないので胎児への影響は考えなくてよい。 エ 含嗽薬は局所薬なので全身へ吸収されることは絶対でない。	答え・解説 正答：ア ア：ヨウ素系殺菌消毒成分は甲状腺ホルモン産生へ影響し得る。甲状腺疾患では治療に悪影響を及ぼすおそれがあり、妊娠中の長期大量使用では胎児の甲状腺機能障害にも注意する。 イ：甲状腺疾患では使用前相談が必要である。 ウ：ヨウ素の一部は胎盤を通過し得る。 エ：口腔・咽頭粘膜から一部が吸収され、全身的な影響を生じることがある。 総合：ヨウ素系殺菌消毒成分は甲状腺ホルモン産生へ影響し得る。甲状腺疾患では治療に悪影響を及ぼすおそれがあり、妊娠中の長期大量使用では胎児の甲状腺機能障害にも注意する。
0078 [呼吸器官に作用する薬] > [口腔咽喉薬・うがい薬] 難易度：標準	
クロルヘキシジングルコン酸塩を含む含嗽薬について、適切なのはどれか。 ア アレルギー既往があっても局所薬なので必ず安全である。 イ まれにショックを生じることがあり、口腔内に傷やひどいただれがある人では強い刺激を生じるため使用を避ける。 ウ 口内炎がひどいほど薬液の吸収が減り、安全性が高まる。 エ クロルヘキシジン系ではショックは報告されていない。	答え・解説 正答：イ ア：該当成分へのアレルギー既往がある人では使用を避ける必要がある。 イ：クロルヘキシジングルコン酸塩等ではまれにアナフィラキシーがあり、口腔内に傷・ひどいただれがある場合は強い刺激や吸収増大が懸念される。 ウ：粘膜障害があると刺激や全身吸収の影響が増えやすい。 エ：まれに重篤なショックが生じることがある。 総合：クロルヘキシジングルコン酸塩等ではまれにアナフィラキシーがあり、口腔内に傷・ひどいただれがある場合は強い刺激や吸収増大が懸念される。

0079 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：基礎	
制酸薬の主な目的として、最も適切なのはどれか。 ア 胃酸の働きを弱め、胃酸過多に伴う胸やけや胃部不快感などを緩和する。 イ 消化酵素を補い、炭水化物・脂質・タンパク質の分解を助ける。 ウ 苦味や香りで唾液・胃液の分泌を促し、弱った胃の働きを高める。 エ 腸内細菌のバランスを整え、便通を調整する。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。制酸薬は胃酸の中和や胃液分泌の抑制などによって、胃酸過多に伴う胸やけ、胃部不快感、吐きけ等を緩和する。 イ：誤り。これは主に消化薬の働きである。 ウ：誤り。これは主に健胃薬の働きである。 エ：誤り。これは主に整腸薬の働きである。 総合：制酸薬は胃酸の中和や胃液分泌の抑制などによって、胃酸過多に伴う胸やけ、胃部不快感、吐きけ等を緩和する。

0080 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：基礎	
健胃薬について、最も適切なのはどれか。 ア 胃酸を化学的に中和することだけを目的とする。 イ 独特の味や香りをもつ生薬などにより唾液や胃液の分泌を促し、胃の働きを高めることを目的とする。 ウ 腸管内の水分を増やして排便を促すことを目的とする。 エ 咳中枢を抑制して咳を鎮めることを目的とする。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。胃酸の中和は制酸薬の主要な目的であり、健胃薬の説明として不十分である。 イ：正しい。健胃薬は、苦味や芳香をもつ生薬成分などにより唾液・胃液の分泌を促し、弱った胃の働きを高める目的で用いられる。 ウ：誤り。これは瀉下薬の作用に該当する。 エ：誤り。これは鎮咳薬の作用である。 総合：健胃薬は、苦味や芳香をもつ生薬成分などにより唾液・胃液の分泌を促し、弱った胃の働きを高める目的で用いられる。

0081 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：基礎	
消化薬の説明として、最も適切なのはどれか。 ア 胃酸の分泌を完全に止めることで食欲を増進させる。 イ 大腸を強く刺激して便秘を治療することだけを目的とする。 ウ 消化酵素を補うなどして、胃や腸の内容物の消化を助ける。 エ 末梢血管を拡張して手足の冷えを改善する。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。消化薬は胃酸分泌を完全に止める薬ではない。 イ：誤り。これは刺激性瀉下薬の説明である。 ウ：正しい。消化薬は、炭水化物・脂質・タンパク質などの分解に働く酵素を補う等により、消化を助ける。 エ：誤り。これは循環器用薬の作用に関連する。 総合：消化薬は、炭水化物・脂質・タンパク質などの分解に働く酵素を補う等により、消化を助ける。
0082 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：基礎	
胸やけだけがはっきりしている購入者への製品選択として、最も適切なのはどれか。 ア 症状が明確でも、作用の異なる成分をできるだけ多く含む総合胃腸薬を必ず選ぶ。 イ 胃腸薬の種類に関係なく、最も服用回数の多い製品を選ぶ。 ウ 医薬部外品であれば作用が強いので、医薬品より優先する。 エ 症状に合った作用をもつ成分が中心の製品を選ぶ。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。症状が明確な場合は、症状に合った成分のみが配合された製品が望ましい。 イ：誤り。服用回数の多さは適否の基準ではない。 ウ：誤り。医薬部外品は人体への作用が緩やかな範囲に限られ、必ずしも強い作用を持つものではない。 エ：正しい。総合胃腸薬は幅広い症状に対応する一方、消化不良・胃痛・胸やけなど症状が明確なら、それに合った成分の製品を選ぶことが望ましい。 総合：総合胃腸薬は幅広い症状に対応する一方、消化不良・胃痛・胸やけなど症状が明確なら、それに合った成分の製品を選ぶことが望ましい。

0083 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：標準	
次のうち、胃酸を中和する制酸成分として用いられるものはどれか。 ア 炭酸水素ナトリウム イ ビフィズス菌 ウ センノシド エ ユビデカレノン	答え・解説 正答：ア ア：正しい。炭酸水素ナトリウム（重曹）は、中和反応によって胃酸の働きを弱める代表的な制酸成分である。 イ：誤り。ビフィズス菌は整腸成分として用いられる生菌成分である。 ウ：誤り。センノシドは大腸刺激性の瀉下成分である。 エ：誤り。ユビデカレノンは循環器用薬に用いられる成分である。 総合：炭酸水素ナトリウム（重曹）は、中和反応によって胃酸の働きを弱める代表的な制酸成分である。
0084 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：標準	
透析療法を受けている人が胃薬を購入しようとしている。特に使用を避ける必要がある成分を含むものはどれか。 ア ビフィズス菌などの生菌成分 イ スクラルファートなどのアルミニウムを含む成分 ウ ジアスターゼなどの消化酵素 エ センブリなどの苦味健胃生薬	答え・解説 正答：イ ア：誤り。生菌成分は整腸目的で用いられ、透析患者でアルミニウム蓄積を問題とする成分ではない。 イ：正しい。アルミニウムを含む胃腸薬成分は、透析患者ではアルミニウムが体内に蓄積しやすく、アルミニウム脳症・骨症の懸念があるため使用を避ける。 ウ：誤り。消化酵素は消化を助ける成分で、アルミニウム蓄積とは別の論点である。 エ：誤り。センブリは苦味による健胃作用を期待して用いられる。 総合：アルミニウムを含む胃腸薬成分は、透析患者ではアルミニウムが体内に蓄積しやすく、アルミニウム脳症・骨症の懸念があるため使用を避ける。

0085 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：標準	
苦味による健胃作用を期待して用いられる生薬の組合せとして、適切なのはどれか。 ア センナ・ダイオウ・センノシド イ ジャコウ・ゴオウ・センソ ウ オウバク・オウレン・センブリ エ コウカ・ルチン・ユビデカレノン	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。これらは主に大腸刺激性の瀉下作用に関連する。 イ：誤り。これらは主に強心薬に用いられる生薬である。 ウ：正しい。オウバク、オウレン、センブリなどは、苦味によって味覚を刺激し、反射的に唾液や胃液の分泌を高める健胃作用を期待して用いられる。 エ：誤り。これらは循環器用薬に関連する成分である。 総合：オウバク、オウレン、センブリなどは、苦味によって味覚を刺激し、反射的に唾液や胃液の分泌を高める健胃作用を期待して用いられる。
0086 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：標準	
芳香性健胃成分を含む胃薬の使用について、適切なのはどれか。 ア 香りは薬効と無関係なので、芳香成分を完全に揮散させてから使用する。 イ 苦味や香りを感じないよう、すべての製品を必ず牛乳に混ぜる。 ウ 芳香性健胃成分は腸内殺菌だけを目的としている。 エ 香りによる作用も期待されるため、剤形によっては香りを損なわないよう適切に使用する。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。芳香性健胃生薬では香り自体が健胃作用に関与するため、意図的に揮散させるのは適切でない。 イ：誤り。製品ごとの用法に従うべきであり、一律に牛乳へ混ぜるものではない。 ウ：誤り。主目的は芳香等による健胃作用であり、腸内殺菌だけを目的とするものではない。 エ：正しい。健胃生薬には苦味や芳香そのものが作用に関与するものがある。用法・剤形に従い、その特性を損なわない使用が必要である。 総合：健胃生薬には苦味や芳香そのものが作用に関与するものがある。用法・剤形に従い、その特性を損なわない使用が必要である。

0087 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：標準	
食べ過ぎによる消化不良に対し、消化を助ける目的で配合される成分として適切なのはどれか。 ア ジアスターゼなどの消化酵素 イ ブチルスコポラミン臭化物 ウ パモ酸ビルビニウム エ ヘプロニカート	答え・解説 正答：ア ア：正しい。ジアスターゼ、プロテアーゼ、リパーゼなどの消化酵素は、食物成分の分解を補助して消化を助ける目的で用いられる。 イ：誤り。これは副交感神経を遮断して胃腸の痙攣を鎮める成分である。 ウ：誤り。これは蟻虫に対する駆虫成分である。 エ：誤り。これは末梢血液循環の改善を目的とする循環器用成分である。 総合：ジアスターゼ、プロテアーゼ、リパーゼなどの消化酵素は、食物成分の分解を補助して消化を助ける目的で用いられる。
0088 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：標準	
脂質の消化を助ける目的で胃腸薬に配合されることがある成分として、最も適切なのはどれか。 ア センソ イ ウルソデオキシコール酸などの胆汁成分 ウ ロベラミド エ ビペラジンリン酸塩	答え・解説 正答：イ ア：誤り。センソは強心作用を期待して用いられる生薬である。 イ：正しい。胆汁成分やウルソデオキシコール酸等は、胆汁分泌を促すなどして脂質の消化を助ける目的で用いられる場合がある。 ウ：誤り。ロベラミドは止瀉成分であり、脂質消化を助ける成分ではない。 エ：誤り。ビペラジンは駆虫薬に用いられる成分である。 総合：胆汁成分やウルソデオキシコール酸等は、胆汁分泌を促すなどして脂質の消化を助ける目的で用いられる場合がある。

0089 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：標準	
胃粘膜保護・修復成分について、適切なのはどれか。 ア スクラルファートは大腸を直接刺激する瀉下成分である。 イ 胃粘膜保護成分は、すべて胃酸分泌を強く促進する。 ウ スクラルファートなどは胃粘膜を保護する目的で用いられるが、アルミニウムを含むため透析患者では注意が必要である。 エ 胃粘膜保護成分は透析患者ほど積極的に使用すべきである。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。スクラルファートは胃粘膜保護・修復成分であり、刺激性瀉下成分ではない。 イ：誤り。胃粘膜保護成分は胃粘膜の保護や修復を目的とし、すべてが胃酸分泌促進を目的とするわけではない。 ウ：正しい。スクラルファート、アルジオキサ等は胃粘膜保護・修復を目的とするが、アルミニウム含有成分では腎機能低下や透析時の蓄積に注意する。 エ：誤り。アルミニウム含有成分は透析患者で蓄積の危険があるため、むしろ使用を避ける必要がある。 総合：スクラルファート、アルジオキサ等は胃粘膜保護・修復を目的とするが、アルミニウム含有成分では腎機能低下や透析時の蓄積に注意する。
0090 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：応用	
腹部膨満感の原因となる消化管内の気泡を細かくして排出しやすくする目的で用いられる成分はどれか。 ア フマル酸第一鉄 イ センノシド ウ アミノ安息香酸エチル エ ジメチルポリシロキサン	答え・解説 正答：エ ア：誤り。鉄欠乏性貧血に用いる鉄分補給成分である。 イ：誤り。大腸刺激性瀉下成分である。 ウ：誤り。胃腸鎮痛鎮痙薬などに用いられる局所麻酔成分である。 エ：正しい。ジメチルポリシロキサンは、消化管内容物中に発生した気泡の分離を促し、ガスによる腹部膨満感を改善する消泡成分として用いられる。 総合：ジメチルポリシロキサンは、消化管内容物中に発生した気泡の分離を促し、ガスによる腹部膨満感を改善する消泡成分として用いられる。

0091 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：応用	
食後の消化不良よりも、空腹時や就寝時の胸やけを主に訴える購入者への助言として適切なものはどれか。 ア 胃酸の出すぎを抑える効果を主とする製剤では、食間や就寝前の服用指示のものが多いため、製品ごとの用法を確認する。 イ どの胃薬も必ず食直後に服用する。 ウ 症状が出る時間帯は製品選択に関係しない。 エ 胸やけがある場合は、健胃作用のみの製品を必ず選ぶ。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。胃酸過多を抑える製剤には食間や就寝前の服用指示が多い。症状の出る時間帯と製品の用法を確認して選択することが重要である。 イ：誤り。胃薬の服用時期は作用目的により異なり、食間や就寝前の指示もある。 ウ：誤り。症状の強い時間帯は、作用目的や服用方法を考える上で重要である。 エ：誤り。胸やけでは胃酸過多への対応が重要なことがあり、症状に合う成分を選ぶ必要がある。 総合：胃酸過多を抑える製剤には食間や就寝前の服用指示が多い。症状の出る時間帯と製品の用法を確認して選択することが重要である。
0092 [胃腸に作用する薬] > [胃薬] 難易度：応用	
医療機関で複数の薬を処方されている人が、市販の胃薬を追加購入しようとしている。最も適切な対応はどれか。 ア 処方薬の内容は確認せず、市販薬を追加する。 イ 処方薬の中に胃の不快感を防ぐための胃薬が含まれていないか確認し、重複使用を避ける。 ウ 胃薬は作用が弱いので、処方薬との重複は問題にならない。 エ 処方薬をすべて中止して市販薬だけに切り替えるよう勧める。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。重複や相互作用を避けるため、処方内容の確認が必要である。 イ：正しい。医療用医薬品の副作用による胃部不快感を防ぐ目的で胃薬が同時処方されている場合があるため、一般用胃薬の追加前に処方内容を確認する。 ウ：誤り。一般用胃薬でも成分重複や相互作用があり得る。 エ：誤り。処方薬の中止を販売者の判断で指示するのは不適切である。 総合：医療用医薬品の副作用による胃部不快感を防ぐ目的で胃薬が同時処方されている場合があるため、一般用胃薬の追加前に処方内容を確認する。

0093 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：基礎	
腸内細菌のバランスを整える目的で用いられる成分として適切なのはどれか。 ア センソ イ オキシサゼイン ウ ビフィズス菌 エ フマル酸第一鉄	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。強心薬に用いられる生薬である。 イ：誤り。胃腸鎮痛鎮痙薬等に用いられる局所麻酔成分である。 ウ：正しい。ビフィズス菌、アシドフィルス菌、乳酸菌、酪酸菌などの生菌成分は、腸内細菌のバランスを整える整腸成分として用いられる。 エ：誤り。鉄欠乏性貧血に用いる鉄分補給成分である。 総合：ビフィズス菌、アシドフィルス菌、乳酸菌、酪酸菌などの生菌成分は、腸内細菌のバランスを整える整腸成分として用いられる。
0094 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：基礎	
急性下痢への対応について、最も適切なのはどれか。 ア 下痢は必ず止めるべき症状であり、原因に関係なく止瀉薬を直ちに使用する。 イ 下痢では脱水の心配がないため、水分摂取を控える。 ウ 発熱や血便を伴っても一般用止瀉薬だけで経過を見る。 エ 下痢は有害物質を排出する防御反応でもあるため、原因によっては安易に止めず、水分・電解質補給も重視する。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。感染性下痢などでは止瀉により悪化することがある。 イ：誤り。下痢では脱水を起こしやすく、水分・電解質補給が重要である。 ウ：誤り。発熱・血便では感染症や重大疾患が疑われ、受診が必要である。 エ：正しい。下痢は腸管内の有害物質を排出する防御反応でもあり、感染性が疑われる場合に止瀉薬で無理に止めると悪化することがある。脱水予防も重要である。 総合：下痢は腸管内の有害物質を排出する防御反応でもあり、感染性が疑われる場合に止瀉薬で無理に止めると悪化することがある。脱水予防も重要である。

0095 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：基礎	
刺激性瀉下成分の作用として、最も適切なのはどれか。 ア 腸管を刺激し、反射的に腸の運動を起こして排便を促す。 イ 腸内細菌を補充してのみ排便を促す。 ウ 胃酸を中和して便を軟らかくする。 エ 赤血球のヘモグロビン合成を促す。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。刺激性瀉下成分は腸管粘膜や腸管を刺激して反射的に蠕動運動を促し、排便を起こす。 イ：誤り。これは整腸成分の説明に近い。 ウ：誤り。胃酸中和は制酸作用であり、刺激性瀉下の作用ではない。 エ：誤り。これは鉄・造血に関する作用である。 総合：刺激性瀉下成分は腸管粘膜や腸管を刺激して反射的に蠕動運動を促し、排便を起こす。
0096 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：基礎	
ロペラミドを含む止瀉薬の使用について、適切なのはどれか。 ア 感染性下痢ほど腸の運動を強く止める目的で積極的に用いる。 イ 食あたりや発熱・血便を伴う感染性下痢が疑われる場合は、安易に使用せず受診を優先する。 ウ 乳幼児に多量投与しても中枢神経系への影響はない。 エ 便秘が続く人に長期連用して排便を促す。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。有害物質の排出を妨げ、症状を悪化させるおそれがある。 イ：正しい。ロペラミドは腸管運動を抑えて下痢を鎮める成分だが、感染性下痢が疑われる場合は病原体や毒素の排出を妨げるおそれがあるため受診判断が重要である。 ウ：誤り。乳幼児の過量摂取で中枢神経系障害、呼吸抑制等が報告されている。 エ：誤り。ロペラミドは止瀉成分であり、便秘に用いる薬ではない。 総合：ロペラミドは腸管運動を抑えて下痢を鎮める成分だが、感染性下痢が疑われる場合は病原体や毒素の排出を妨げるおそれがあるため受診判断が重要である。

0097 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：標準	
下痢に対して腸粘膜を収れんさせたり、有害物質を吸着させる目的で用いられる成分の説明として適切なのはどれか。 ア タンニン酸アルブミンは刺激性瀉下成分である。 イ カオリンは強心成分として用いられる。 ウ タンニン酸アルブミンは収れん成分、カオリンや薬用炭は吸着成分として用いられる。 エ 薬用炭は鉄欠乏性貧血の鉄補給を目的とする。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。タンニン酸アルブミンは止瀉目的の収れん成分である。 イ：誤り。カオリンは腸管内での吸着を期待する止瀉成分である。 ウ：正しい。止瀉薬には、腸粘膜を収れんさせる成分や、腸管内の有害物質・過剰な水分などを吸着する成分が用いられる。 エ：誤り。薬用炭は鉄分補給成分ではない。 総合：止瀉薬には、腸粘膜を収れんさせる成分や、腸管内の有害物質・過剰な水分などを吸着する成分が用いられる。

0098 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：標準	
木クレオソートの止瀉作用として、適切なのはどれか。 ア 大腸を強く刺激して便を排出させる。 イ 胃酸を中和するだけで下痢を止める。 ウ 赤血球の産生を促して腸運動を抑える。 エ 過剰な腸管運動を正常化し、水分や電解質の分泌を抑える。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。これは刺激性瀉下作用であり、木クレオソートの止瀉作用とは逆である。 イ：誤り。木クレオソートの止瀉作用は胃酸中和によるものではない。 ウ：誤り。造血作用とは関係しない。 エ：正しい。木クレオソートは、過剰な腸管蠕動を正常化し、水分・電解質分泌を抑えることにより止瀉作用を示す。 総合：木クレオソートは、過剰な腸管蠕動を正常化し、水分・電解質分泌を抑えることにより止瀉作用を示す。

0099 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：標準	
センノシドの瀉下作用について、最も適切なのはどれか。 ア 胃や小腸でほとんど消化されず、大腸内細菌により分解され、その生成物が大腸を刺激する。 イ 胃内で直ちに鉄イオンへ変化して大腸を刺激する。 ウ 小腸で完全に吸収され、心筋を刺激して排便を起こす。 エ 腸内細菌を死滅させることで便の水分を減らす。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。センナ中のセンノシドは大腸内細菌により分解され、分解生成物が大腸を刺激して瀉下作用を示す。 イ：誤り。センノシドの作用は鉄イオンへの変化によるものではない。 ウ：誤り。主作用は大腸内細菌による代謝後の大腸刺激である。 エ：誤り。センノシドは腸内細菌を殺菌する成分ではない。 総合：センナ中のセンノシドは大腸内細菌により分解され、分解生成物が大腸を刺激して瀉下作用を示す。
0100 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：標準	
妊婦または授乳中の女性がセンナ・センノシド配合の瀉下薬を希望している。適切な説明はどれか。 ア 妊娠・授乳中でも通常より多量に使用すれば安全性が高まる。 イ 妊婦では使用を避けるべきで、授乳中は乳児に下痢を生じるおそれがあるため使用を避けるか授乳を避ける。 ウ 母乳中へ移行しないため、授乳中の注意は不要である。 エ 妊婦では腸の刺激が流産・早産の危険を下げるため推奨される。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。用量増加は副作用リスクを高め、不適切である。 イ：正しい。刺激性瀉下薬は妊婦で流産・早産を誘発するおそれがあり、特にセンナ・センノシドは使用を避ける。授乳中も乳児の下痢に注意する。 ウ：誤り。センナ・センノシド等の成分の一部は乳汁中へ移行することが知られている。 エ：誤り。刺激性瀉下薬は腸の急激な動きから流産・早産を誘発するおそれがある。 総合：刺激性瀉下薬は妊婦で流産・早産を誘発するおそれがあり、特にセンナ・センノシドは使用を避ける。授乳中も乳児の下痢に注意する。

0101 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：標準	
酸化マグネシウムなどの無機塩類が瀉下作用を示す仕組みとして適切なのはどれか。 ア 大腸内細菌を完全に除去して排便を促す。 イ 胃酸分泌を強く促し、その刺激だけで排便を起こす。 ウ 腸内容物の浸透圧を高めて便中の水分量を増し、排便を促す。 エ 心筋収縮を高めて腸への血流を減らす。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。無機塩類の主作用は浸透圧による水分保持である。 イ：誤り。胃酸分泌促進が主作用ではない。 ウ：正しい。マグネシウム塩などの無機塩類は、腸管内の浸透圧を高めて水分を保持し、便を軟らかくして排便を促す。 エ：誤り。強心作用によるものではない。 総合：マグネシウム塩などの無機塩類は、腸管内の浸透圧を高めて水分を保持し、便を軟らかくして排便を促す。
0102 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：標準	
便を軟らかくする瀉下成分の説明として適切なのはどれか。 ア 膨潤性成分は腸内細菌を殺菌することでのみ作用する。 イ 湿潤性成分は心筋を刺激して排便を促す。 ウ どちらも胃酸を中和する制酸成分である。 エ 膨潤性成分は水分を吸収して便のかさを増し、湿潤性成分は便への水分浸透を助ける。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。膨潤性成分は水分を吸収して便のかさを増す。 イ：誤り。湿潤性成分の作用は便への水分浸透を助けることにある。 ウ：誤り。瀉下目的の成分であり、制酸成分ではない。 エ：正しい。カルボキシメチルセルロースナトリウム等の膨潤性成分は便のかさを増し、ジオクチルソジウムスルホサクシネート等の湿潤性成分は便への水分浸透を助ける。 総合：カルボキシメチルセルロースナトリウム等の膨潤性成分は便のかさを増し、ジオクチルソジウムスルホサクシネート等の湿潤性成分は便への水分浸透を助ける。

0103 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：標準	
ヒマシ油類の使用について、適切なのはどれか。 ア 妊婦や3歳未満の小児では使用を避けるべきで、駆虫薬との併用にも注意する。 イ 妊婦では流産・早産の危険を下げるため推奨される。 ウ 3歳未満の小児でも成人量を用いる。 エ 駆虫薬と併用すると駆虫成分の吸収が必ず低下して安全になる。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。ヒマシ油類は強い瀉下作用をもち、妊婦や3歳未満の小児には不適切である。また駆虫薬との併用で駆虫成分の吸収を高めるおそれがある。 イ：誤り。ヒマシ油類は腸の急激な動きにより流産・早産を誘発するおそれがある。 ウ：誤り。3歳未満の小児では使用を避ける。 エ：誤り。ヒマシ油により駆虫成分が吸収されやすくなり副作用の危険が増すことがある。 総合：ヒマシ油類は強い瀉下作用をもち、妊婦や3歳未満の小児には不適切である。また駆虫薬との併用で駆虫成分の吸収を高めるおそれがある。
0104 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：応用	
下痢を訴える購入者で、一般用止瀉薬による自己対処より受診を優先すべき状態はどれか。 ア 冷たい物を摂り過ぎた直後の一時的な軟便で、全身状態は良好である。 イ 発熱と血便を伴っている。 ウ 旅行先で少し便が軟らかいが、発熱や血便はない。 エ 緊張時だけ一時的に便がゆるくなる。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。軽度で一過性なら一般用医薬品で対処できることがある。 イ：正しい。発熱や血便を伴う下痢では、食中毒菌等の感染症や腸管出血を伴う疾患が疑われるため、安易に止瀉薬を用いず受診を勧める。 ウ：誤り。重い随伴症状がなければ、原因と経過を確認しながら自己対処可能な場合がある。 エ：誤り。精神的ストレスによる一過性下痢もあり、持続や重症化がなければ直ちに緊急受診とは限らない。 総合：発熱や血便を伴う下痢では、食中毒菌等の感染症や腸管出血を伴う疾患が疑われるため、安易に止瀉薬を用いず受診を勧める。

0105 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：応用	
刺激性瀉下薬を毎日長期間使用している人への説明として、適切なのはどれか。 ア 長期連用ほど少量で効くようになるので継続を勧める。 イ 便秘では原因確認は不要で、刺激性瀉下薬だけを増量し続ける。 ウ 連用により腸管の感受性が低下して効きにくくなることもあるため、生活習慣改善や他の方法も検討し、漫然と常用しない。 エ 下痢が出るまで増量するのが適正使用である。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。刺激性瀉下薬では連用で感受性が低下し、効きにくくなることもある。 イ：誤り。慢性便秘では生活習慣や基礎疾患の評価が必要で、漫然と増量するのは不適切である。 ウ：正しい。刺激性瀉下成分は連用で腸管の感受性が低下し、効果が弱くなることもある。便秘対策は食事・運動・整腸成分等も含めて考える。 エ：誤り。過量使用は激しい腹痛や下痢等の副作用につながる。 総合：刺激性瀉下成分は連用で腸管の感受性が低下し、効果が弱くなることもある。便秘対策は食事・運動・整腸成分等も含めて考える。
0106 [胃腸に作用する薬] > [腸の薬] 難易度：応用	
ある医薬品を使い始めてから原因不明の下痢が続くようになった人への対応として、最も適切なのはどれか。 ア 原因薬を継続しながら止瀉薬を倍量使用する。 イ 下痢は薬の副作用では起こらないので、食品だけを原因と考える。 ウ 便秘に変わるまで放置する。 エ 止瀉薬を追加して症状だけを抑える前に、原因となり得る医薬品の使用を中止して医師・薬剤師等へ相談する。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。薬剤性副作用が疑われる場合、原因薬の継続と対症薬の安易な追加は不適切である。 イ：誤り。医薬品の副作用として下痢や便秘が現れることがある。 ウ：誤り。原因薬の評価と適切な相談が必要である。 エ：正しい。医薬品の副作用として下痢・便秘が現れることがある。原因が明確でない場合は安易に止瀉薬・瀉下薬を追加せず、原因薬の中止と専門家への相談が重要である。 総合：医薬品の副作用として下痢・便秘が現れることがある。原因が明確でない場合は安易に止瀉薬・瀉下薬を追加せず、原因薬の中止と専門家への相談が重要である。

0107 [胃腸に作用する薬] > [胃腸鎮痛鎮痙薬] 難易度：基礎	
ブチルスコポラミン臭化物などの胃腸鎮痛鎮痙成分の主な作用はどれか。 ア 副交感神経の働きを抑え、消化管平滑筋の痙攣を鎮める。 イ 交感神経を完全に遮断して胃酸分泌を増やす。 ウ 腸内細菌を増やして整腸する。 エ 鉄分を補充して胃痛を改善する。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。抗コリン作用をもつ副交感神経遮断成分は、消化管平滑筋の過度な緊張や痙攣を抑えて腹痛を緩和する。 イ：誤り。ブチルスコポラミン等は主に副交感神経遮断作用を示す。 ウ：誤り。整腸成分とは作用機序が異なる。 エ：誤り。鉄補給は貧血治療の目的である。 総合：抗コリン作用をもつ副交感神経遮断成分は、消化管平滑筋の過度な緊張や痙攣を抑えて腹痛を緩和する。
0108 [胃腸に作用する薬] > [胃腸鎮痛鎮痙薬] 難易度：基礎	
副交感神経遮断成分でみられやすい副作用の組合せとして適切なのはどれか。 ア 下痢・流涙・縮瞳・頻尿 イ 口渇・便秘・目のかすみ・排尿困難 ウ 黒色便・鉄欠乏・貧血 エ 咳・痰・鼻汁だけ	答え・解説 正答：イ ア：誤り。これは副交感神経刺激時にみられやすい方向の症状である。 イ：正しい。抗コリン作用により、唾液分泌低下による口渇、腸運動低下による便秘、散瞳に伴う目のかすみ、排尿困難などが起こり得る。 ウ：誤り。鉄製剤や消化管出血に関連する論点である。 エ：誤り。胃腸鎮痛鎮痙薬の代表的な抗コリン性副作用ではない。 総合：抗コリン作用により、唾液分泌低下による口渇、腸運動低下による便秘、散瞳に伴う目のかすみ、排尿困難などが起こり得る。

0109 [胃腸に作用する薬] > [胃腸鎮痛鎮痙薬] 難易度：基礎	
副交感神経遮断成分を含む胃腸鎮痛鎮痙薬について、使用前に特に相談が必要な人はどれか。 ア 軽い擦り傷があるだけの人 イ 過去に虫歯治療を受けた人 ウ 排尿困難がある人や緑内障の診断を受けた人 エ 視力が正常で排尿症状もない健康成人	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。胃腸鎮痛鎮痙薬の抗コリン作用とは直接関係しない。 イ：誤り。虫歯治療歴だけでは抗コリン成分の主要注意事項にはならない。 ウ：正しい。副交感神経遮断成分は眼圧上昇や排尿困難を悪化させるおそれがあるため、緑内障や排尿困難等がある人では事前相談が必要である。 エ：誤り。主要な基礎疾患リスクがなければ、用法用量に従った使用が基本となる。 総合：副交感神経遮断成分は眼圧上昇や排尿困難を悪化させるおそれがあるため、緑内障や排尿困難等がある人では事前相談が必要である。
0110 [胃腸に作用する薬] > [胃腸鎮痛鎮痙薬] 難易度：標準	
ブチルスコポラミン臭化物について、まれに起こり得る重篤な副作用として知られるものはどれか。 ア 鉄欠乏性貧血 イ 脂質異常症 ウ 虫垂炎そのもの エ ショック（アナフィラキシー）	答え・解説 正答：エ ア：誤り。ブチルスコポラミンの代表的重篤副作用ではない。 イ：誤り。薬理作用上の代表的重篤副作用ではない。 ウ：誤り。薬の副作用ではなく疾患である。 エ：正しい。ブチルスコポラミン臭化物では、まれにショック（アナフィラキシー）が生じることが知られている。 総合：ブチルスコポラミン臭化物では、まれにショック（アナフィラキシー）が生じることが知られている。

0111 [胃腸に作用する薬] > [胃腸鎮痛鎮痙薬] 難易度：標準	
授乳中の女性がロートエクス配合の胃腸鎮痛鎮痙薬を希望している。適切な説明はどれか。 ア 成分の一部が母乳中へ移行して乳児の頻脈を起こすおそれがあるため、使用を避けるか使用中の授乳を避ける。 イ 母乳中には移行しないため、授乳への配慮は不要である。 ウ 乳児の脈を遅くする目的で積極的に使用する。 エ 授乳量を増やす作用があるため、授乳促進目的で用いる。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。ロートエクスは乳汁移行により乳児の頻脈を生じるおそれがあり、授乳中は使用を避けるか授乳を避ける必要がある。 イ：誤り。ロートエクスの成分の一部は母乳中へ移行することが知られている。 ウ：誤り。乳児に頻脈を生じるおそれがあり、治療目的の使用ではない。 エ：誤り。ロートエクスにより母乳が出にくくなることもある。 総合：ロートエクスは乳汁移行により乳児の頻脈を生じるおそれがあり、授乳中は使用を避けるか授乳を避ける必要がある。
0112 [胃腸に作用する薬] > [胃腸鎮痛鎮痙薬] 難易度：標準	
パパベリン塩酸塩の胃腸鎮痛鎮痙作用について、適切なのはどれか。 ア 腸内細菌の代謝によりセンノシドへ変化して作用する。 イ 消化管平滑筋に直接作用して痙攣を鎮め、副交感神経遮断とは異なる機序で作用する。 ウ 鉄分を補い、ヘモグロ빈を増やして鎮痛する。 エ 胃酸を中和する無機塩類としてのみ働く。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。パパベリンはセンノシドとは異なる成分である。 イ：正しい。パパベリン塩酸塩は消化管平滑筋へ直接作用して緊張を緩める成分で、抗コリン性の副交感神経遮断成分とは作用機序が異なる。 ウ：誤り。鉄補給作用はない。 エ：誤り。制酸成分ではなく鎮痙成分である。 総合：パパベリン塩酸塩は消化管平滑筋へ直接作用して緊張を緩める成分で、抗コリン性の副交感神経遮断成分とは作用機序が異なる。

0113 [胃腸に作用する薬] > [胃腸鎮痛鎮痙薬] 難易度：標準	
胃腸鎮痛鎮痙薬に配合される局所麻酔成分の組合せとして適切なのはどれか。 ア センナ・センノシド イ ソイステロール・パンテチン ウ アミノ安息香酸エチル・オキセサゼイン エ フマル酸第一鉄・クエン酸鉄アンモニウム	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。大腸刺激性瀉下成分である。 イ：誤り。高コレステロール改善薬に用いられる成分である。 ウ：正しい。アミノ安息香酸エチル、オキセサゼインは、消化管粘膜等に対する局所麻酔作用により鎮痛鎮痙効果を期待して用いられる。 エ：誤り。貧血用薬に用いられる鉄分補給成分である。 総合：アミノ安息香酸エチル、オキセサゼインは、消化管粘膜等に対する局所麻酔作用により鎮痛鎮痙効果を期待して用いられる。
0114 [胃腸に作用する薬] > [胃腸鎮痛鎮痙薬] 難易度：標準	
アミノ安息香酸エチルを含む胃腸鎮痛鎮痙薬について、6歳未満の小児への使用を避ける主な理由はどれか。 ア 必ず高コレステロール血症を起こすため イ 鉄の吸収が過剰になり黒色便が出るため ウ 腸内細菌を完全に消失させるため エ メトヘモグロビン血症を起こすおそれがあるため	答え・解説 正答：エ ア：誤り。そのような理由ではない。 イ：誤り。鉄製剤の論点であり、アミノ安息香酸エチルの年齢制限理由ではない。 ウ：誤り。そのような作用はない。 エ：正しい。アミノ安息香酸エチルはメトヘモグロビン血症を起こすおそれがあるため、6歳未満の小児では使用を避ける。 総合：アミノ安息香酸エチルはメトヘモグロビン血症を起こすおそれがあるため、6歳未満の小児では使用を避ける。

0115 [胃腸に作用する薬] > [胃腸鎮痛鎮痙薬] 難易度：応用	
胃痛に対して局所麻酔成分を含む胃腸薬を長期間使用し続けることが不適切な主な理由はどれか。 ア 痛みを感じにくくすることで、重大な消化器疾患や状態悪化を見過ごすおそれがあるため イ 胃痛を感じないほど必ず胃酸が増えるため ウ 鉄分が急速に不足するため エ 腸内細菌が増えすぎて必ず便秘になるため	答え・解説 正答：ア ア：正しい。局所麻酔成分は痛みを感じにくくするため、症状を隠して重大な消化器疾患の発見を遅らせるおそれがあり、漫然と長期使用すべきでない。 イ：誤り。局所麻酔作用の本質は知覚を鈍らせることであり、必ず胃酸が増えるわけではない。 ウ：誤り。局所麻酔成分の主要な長期使用リスクではない。 エ：誤り。主要な問題は重大疾患の症状を隠す可能性である。 総合：局所麻酔成分は痛みを感じにくくするため、症状を隠して重大な消化器疾患の発見を遅らせるおそれがあり、漫然と長期使用すべきでない。
0116 [胃腸に作用する薬] > [胃腸鎮痛鎮痙薬] 難易度：応用	
副交感神経遮断成分を含む胃腸鎮痛鎮痙薬を使用した人への説明として、適切なのはどれか。 ア 服用後は視力が必ず向上するので運転に適している。 イ 眠気や目のかすみ等が起こることがあるため運転を避け、同様の抗コリン作用をもつ乗物酔い薬等との重複にも注意する。 ウ 乗物酔い薬と併用すると副作用が相殺される。 エ 口渇や排尿困難が出ても作用が強い証拠なので継続する。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。目のかすみや異常なまぶしさ等が起こり得る。 イ：正しい。抗コリン成分では眠気・目のかすみ等による事故リスクがあり、運転を避ける。類似作用をもつ胃腸薬・乗物酔い薬等との重複にも注意する。 ウ：誤り。抗コリン作用が重複し、副作用が強まるおそれがある。 エ：誤り。副作用が疑われる場合は使用中止や相談が必要である。 総合：抗コリン成分では眠気・目のかすみ等による事故リスクがあり、運転を避ける。類似作用をもつ胃腸薬・乗物酔い薬等との重複にも注意する。

0117 [胃腸に作用する薬] > [浣腸薬・駆虫薬] 難易度：基礎	
グリセリンを用いた浣腸薬の主な働きとして適切なのはどれか。 ア 胃酸を中和して胸やけを抑える。 イ 心筋を刺激して全身の血流を増やす。 ウ 直腸を刺激するとともに便を軟らかくし、排便を促す。 エ 腸内の寄生虫を殺すことだけを目的とする。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。制酸薬の作用である。 イ：誤り。強心薬の作用に関連する。 ウ：正しい。グリセリン浣腸は直腸への刺激と浸透圧による便の軟化などによって排便を促す。 エ：誤り。これは駆虫薬の目的である。 総合：グリセリン浣腸は直腸への刺激と浸透圧による便の軟化などによって排便を促す。

0118 [胃腸に作用する薬] > [浣腸薬・駆虫薬] 難易度：基礎	
浣腸薬の使用について、適切なのはどれか。 ア 毎日使用するほど少量で効くようになる。 イ 腹痛・吐きけが強いときほど自己判断で繰り返し使用する。 ウ 浣腸薬は全身作用しかないため、直腸の状態は関係しない。 エ 連用すると直腸の感受性が低下して効きにくくなることもあるため、漫然と常用しない。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。連用で感受性低下を生じ、効きにくくなることもある。 イ：誤り。急性腹症等の可能性があり、受診判断が必要である。 ウ：誤り。局所的に直腸を刺激して排便を促す薬である。 エ：正しい。浣腸薬は一時的な便秘対処に用い、常用による感受性低下や依存を避ける。強い腹痛等がある場合は自己使用より受診を優先する。 総合：浣腸薬は一時的な便秘対処に用い、常用による感受性低下や依存を避ける。強い腹痛等がある場合は自己使用より受診を優先する。

0119 [胃腸に作用する薬] > [浣腸薬・駆虫薬] 難易度：標準	
便秘に用いるピサコジル坐剤について、最も適切なのはどれか。 ア 直腸内で溶けて大腸を刺激し、排便を促す。 イ 口腔内で溶かし、咽頭の炎症を抑える。 ウ 胃内で胃酸を中和する。 エ 皮膚に塗って末梢血行を改善する。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。ピサコジルは大腸刺激性の瀉下成分で、坐剤では直腸内で作用して排便を促す。 イ：誤り。坐剤は直腸に使用する製剤であり、口腔用ではない。 ウ：誤り。ピサコジル坐剤は制酸薬ではない。 エ：誤り。外用循環器用薬ではない。 総合：ピサコジルは大腸刺激性の瀉下成分で、坐剤では直腸内で作用して排便を促す。
0120 [胃腸に作用する薬] > [浣腸薬・駆虫薬] 難易度：標準	
一般用駆虫薬の使用目的として適切なのはどれか。 ア ウイルス性胃腸炎のウイルスを駆除する。 イ 腸管内の回虫や蟯虫などを駆除し、便とともに排出させる。 ウ 腸内細菌をすべて除去して下痢を止める。 エ 胃酸を中和して食欲を増進する。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。駆虫薬は寄生虫を対象とし、ウイルス感染症を治療する薬ではない。 イ：正しい。駆虫薬は腸管内の寄生虫を対象とする薬で、成分ごとに回虫や蟯虫などの対象が異なる。 ウ：誤り。腸内細菌をすべて除去する薬ではない。 エ：誤り。制酸・健胃作用とは異なる。 総合：駆虫薬は腸管内の寄生虫を対象とする薬で、成分ごとに回虫や蟯虫などの対象が異なる。

0121 [胃腸に作用する薬] > [浣腸薬・駆虫薬] 難易度：標準	
カイニン酸の駆虫作用として適切なのはどれか。 ア 蟯虫の栄養代謝を抑えて赤く着色させる。 イ 回虫・蟯虫のアセチルコリン伝達を妨げて筋を麻痺させる。 ウ 回虫に痙攣を起こさせ、排便とともに排出させる。 エ 腸内容物の浸透圧を高めて便を軟らかくする。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。これはバモ酸ビルビニウムに関連する説明である。 イ：誤り。これはピペラジンに関する説明である。 ウ：正しい。カイニン酸は回虫に痙攣を起こさせ、その結果として虫体を排便とともに排出させる。 エ：誤り。これは無機塩類瀉下成分の作用である。 総合：カイニン酸は回虫に痙攣を起こさせ、その結果として虫体を排便とともに排出させる。
0122 [胃腸に作用する薬] > [浣腸薬・駆虫薬] 難易度：標準	
ピペラジンリン酸塩について、適切なのはどれか。 ア 蟯虫の呼吸を抑えるだけで、回虫には作用しない。 イ 腎機能が低下しているほど速やかに排泄され安全性が高まる。 ウ 服用後に痙攣が出ても副作用ではない。 エ 回虫や蟯虫の運動筋を麻痺させる作用があり、肝臓病・腎臓病などでは使用前に相談が必要である。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。ピペラジンは回虫・蟯虫の双方を対象とする。 イ：誤り。腎機能低下では体内に滞留し、副作用が生じやすくなるおそれがある。 ウ：誤り。ピペラジンでは痙攣などの副作用が現れることがある。 エ：正しい。ピペラジンはアセチルコリン伝達を妨げて回虫・蟯虫の運動筋を麻痺させる。肝・腎機能低下等では副作用リスクに注意する。 総合：ピペラジンはアセチルコリン伝達を妨げて回虫・蟯虫の運動筋を麻痺させる。肝・腎機能低下等では副作用リスクに注意する。

0123 [胃腸に作用する薬] > [浣腸薬・駆虫薬] 難易度：応用	
パモ酸ピルビニウムを含む駆虫薬について、適切なのはどれか。 ア 蟻虫の呼吸や栄養分の代謝を抑えて殺虫し、尿や便が赤～赤褐色に着色することがある。 イ 主に回虫を痙攣させるカイニン酸と同じ作用だけを示す。 ウ 便が赤くなるのは必ず消化管出血を意味する。 エ 水に非常によく溶けるため、消化管から完全に吸収される。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。パモ酸ピルビニウムは蟻虫の呼吸・栄養代謝を抑えて殺虫する。成分色により尿や便が赤くなることがある。 イ：誤り。パモ酸ピルビニウムは主に蟻虫に対し、呼吸・代謝を抑える作用を示す。 ウ：誤り。成分自体が赤～赤褐色で、便や尿が着色することがある。 エ：誤り。水に溶けにくく、消化管からの吸収は少ないとされる。 総合：パモ酸ピルビニウムは蟻虫の呼吸・栄養代謝を抑えて殺虫する。成分色により尿や便が赤くなることがある。

0124 [胃腸に作用する薬] > [浣腸薬・駆虫薬] 難易度：応用	
パモ酸ピルビニウムを服用する人への説明として、最も適切なのはどれか。 ア ヒマシ油と一緒に服用して駆虫成分の吸収を高める。 イ ヒマシ油との併用を避け、脂質の多い食事やアルコールも避ける。 ウ 脂質の多い食事と一緒になら腸管内にとどまりやすく安全である。 エ 便や尿の赤色化を防ぐため大量の鉄剤を併用する。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。駆虫成分が吸収されやすくなり、副作用リスクが高まるため併用を避ける。 イ：正しい。パモ酸ピルビニウムは水に溶けにくく吸収は少ないが、ヒマシ油、脂質の多い食事、アルコールにより吸収が高まるおそれがあるため避ける。 ウ：誤り。脂質により吸収が高まる可能性があるため避ける。 エ：誤り。赤色化は成分の色によるもので、鉄剤併用の理由にはならない。 総合：パモ酸ピルビニウムは水に溶けにくく吸収は少ないが、ヒマシ油、脂質の多い食事、アルコールにより吸収が高まるおそれがあるため避ける。

0125 [心臓・血液に作用する薬] > [強心薬] 難易度：基礎	
疲労やストレスなどに伴う軽度の動悸・息切れに用いる一般用強心薬について、その使用目的を正しく述べたものはどれか。 ア 重篤な心筋梗塞を自宅で治療する。 イ 感染症による発熱を下げる。 ウ 疲労やストレス等による軽度の心臓の働きの乱れに対し、心臓の働きを整えて動悸や息切れを改善する。 エ 鉄欠乏性貧血を治療する。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。一般用強心薬は重篤な心疾患の治療を目的とするものではない。 イ：誤り。解熱作用を主目的とする薬ではない。 ウ：正しい。一般用強心薬は、疲労やストレス等による軽度な心臓の働きの乱れに伴う動悸・息切れ等を改善する目的で用いられる。 エ：誤り。鉄欠乏性貧血には鉄製剤が用いられる。 総合：一般用強心薬は、疲労やストレス等による軽度な心臓の働きの乱れに伴う動悸・息切れ等を改善する目的で用いられる。
0126 [心臓・血液に作用する薬] > [強心薬] 難易度：基礎	
強心薬に配合される生薬センソの基原と薬理的特徴の組合せとして、正しいものはどれか。 ア ウシの胆嚢中の結石を基原とする。 イ 雄鹿の角化していない幼角を基原とする。 ウ ベニバナの花を基原とし、主に末梢血行改善に用いる。 エ ヒキガエル類の耳腺分泌物を基原とし、微量で強い強心作用を示す。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。これはゴオウの説明である。 イ：誤り。これはロクジョウの説明である。 ウ：誤り。これはコウカの説明である。 エ：正しい。センソはヒキガエル科の動物の耳腺分泌物を基原とする生薬で、微量でも強い強心作用を示す。 総合：センソはヒキガエル科の動物の耳腺分泌物を基原とする生薬で、微量でも強い強心作用を示す。

0127 [心臓・血液に作用する薬] > [強心薬] 難易度：標準	
センソ配合の内服固形製剤について、適切なのはどれか。 ア 口中で噛み砕くと舌が麻痺することがあるため噛まずに服用し、一般用医薬品では1日量5mg以下となるよう定められている。 イ 噛み砕くことで局所麻酔作用を高めるのが正しい。 ウ 一般用医薬品ではセンソの1日量に上限はない。 エ 通常量では悪心や嘔吐は起こらない。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。センソは有効域が比較的狭く、一般用医薬品では1日量5mg以下。固形製剤は噛まずに服用し、悪心・嘔吐にも注意する。 イ：誤り。舌等が麻痺するおそれがあるため噛まずに服用する。 ウ：誤り。一般用医薬品では1日量5mg以下となるよう定められている。 エ：誤り。通常用量でも悪心・嘔吐が現れることがある。 総合：センソは有効域が比較的狭く、一般用医薬品では1日量5mg以下。固形製剤は噛まずに服用し、悪心・嘔吐にも注意する。
0128 [心臓・血液に作用する薬] > [強心薬] 難易度：標準	
強心薬に用いられる生薬の説明として、適切なのはどれか。 ア ジャコウは雄鹿の角化していない幼角を基原とする。 イ ゴオウはウシの胆嚢中に生じた結石を基原とし、強心作用のほか末梢血管拡張や鎮静作用があるとされる。 ウ ロクジョウはヒキガエルの耳腺分泌物を基原とする。 エ ゴオウはペニバナの花を基原とする。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。雄鹿の幼角はロクジョウである。 イ：正しい。ゴオウはウシの胆嚢中の結石、ジャコウはジャコウジカの雄の麝香腺分泌物、ロクジョウは雄鹿の角化していない幼角を基原とする。 ウ：誤り。ヒキガエルの耳腺分泌物はセンソである。 エ：誤り。ペニバナを基原とするのはコウカである。 総合：ゴオウはウシの胆嚢中の結石、ジャコウはジャコウジカの雄の麝香腺分泌物、ロクジョウは雄鹿の角化していない幼角を基原とする。

0129 [心臓・血液に作用する薬] > [強心薬] 難易度：標準	
強心薬という「気つけ」の説明として適切なのはどれか。 ア 失神者を必ず蘇生できる救命処置をいう。 イ 胃酸を中和して食欲を回復させる効果をいう。 ウ 心臓の働きの低下による一時的なめまい・立ちくらみに対し、意識をはっきりさせ活力を回復させる効果をいう。 エ 便秘を解消して腹部膨満を改善する効果をいう。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。気つけは救命処置そのものを意味しない。 イ：誤り。胃腸薬の作用とは異なる。 ウ：正しい。気つけは、軽度の心臓機能低下に伴う一時的なめまい・立ちくらみ等で、意識をはっきりさせ活力を回復させることを指す。 エ：誤り。瀉下薬の作用とは異なる。 総合：気つけは、軽度の心臓機能低下に伴う一時的なめまい・立ちくらみ等で、意識をはっきりさせ活力を回復させることを指す。
0130 [心臓・血液に作用する薬] > [強心薬] 難易度：標準	
苓桂朮甘湯について、適切なのはどれか。 ア センソを主成分とし、心筋を直接刺激する漢方処方である。 イ 大腸を強く刺激することだけを目的とする。 ウ カンゾウを含まないため偽アルドステロン症の注意は不要である。 エ 強心成分を含むというより、主に利尿作用で水分の偏在を改善することを主眼とし、めまい・動悸等に用いられる。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。苓桂朮甘湯に強心作用を期待するセンソは含まれない。 イ：誤り。主眼は水毒の改善であり、瀉下薬ではない。 ウ：誤り。構成生薬にカンゾウを含み、偽アルドステロン症に注意する。 エ：正しい。苓桂朮甘湯は、めまい・ふらつき・動悸等に用いられるが、強心生薬ではなく主に利尿作用で水毒の排出を促す。カンゾウ含有にも注意する。 総合：苓桂朮甘湯は、めまい・ふらつき・動悸等に用いられるが、強心生薬ではなく主に利尿作用で水毒の排出を促す。カンゾウ含有にも注意する。

0131 [心臓・血液に作用する薬] > [強心薬] 難易度：応用	
安静時にも動悸と息切れが繰り返し起こる人が強心薬を求めている。最も適切な対応はどれか。 ア 心疾患、貧血、甲状腺疾患など基礎疾患の可能性もあるため、一般用強心薬だけで長く対処せず受診を勧める。 イ 疲労によるものと決めつけ、強心薬を長期連用するよう勧める。 ウ 強心薬を通常量の数倍服用して症状を抑える。 エ 動悸と息切れは心臓以外の病気では起こらないと説明する。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。動悸・息切れは軽度の疲労だけでなく、心疾患、貧血、呼吸器疾患、甲状腺機能異常などでも起こる。持続・反復する場合は受診が必要である。 イ：誤り。安静時や反復する症状では基礎疾患を考える必要がある。 ウ：誤り。過量使用は副作用リスクを高め不適切である。 エ：誤り。貧血、呼吸器疾患、甲状腺機能異常等でも起こり得る。 総合：動悸・息切れは軽度の疲労だけでなく、心疾患、貧血、呼吸器疾患、甲状腺機能異常などでも起こる。持続・反復する場合は受診が必要である。
0132 [心臓・血液に作用する薬] > [高コレステロール改善薬] 難易度：基礎	
LDLとHDLの役割について、適切なのはどれか。 ア LDLもHDLもコレステロールを末梢から肝臓へ運ぶ。 イ LDLはコレステロールを肝臓から末梢へ運び、HDLは末梢のコレステロールを取り込んで肝臓へ運ぶ。 ウ HDLはコレステロールを肝臓から末梢へ運ぶ。 エ コレステロールは水に溶けるため、リポタンパク質と結合しない。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。LDLとHDLでは主な運搬方向が異なる。 イ：正しい。LDLは肝臓から末梢へ、HDLは末梢から肝臓へコレステロールを運ぶ。LDL高値・HDL低値は動脈硬化リスクを高める。 ウ：誤り。これはLDLの主な役割である。 エ：誤り。コレステロールは水に溶けにくく、血中ではリポタンパク質として存在する。 総合：LDLは肝臓から末梢へ、HDLは末梢から肝臓へコレステロールを運ぶ。LDL高値・HDL低値は動脈硬化リスクを高める。

0133 [心臓・血液に作用する薬] > [高コレステロール改善薬] 難易度：基礎	
手引きに示される脂質異常症の検査値の目安として適切なのはどれか。 ア LDL 40mg/dL未満のみ イ HDL 140mg/dL以上のみ ウ LDL 140mg/dL以上、HDL 40mg/dL未満、空腹時中性脂肪150mg/dL以上のいずれか エ 空腹時中性脂肪40mg/dL未満のみ	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。LDLは低値ではなく高値が問題となる。 イ：誤り。HDLは低値が問題となる。 ウ：正しい。手引きでは、LDL 140mg/dL以上、HDL 40mg/dL未満、空腹時中性脂肪150mg/dL以上のいずれかを脂質異常症の目安としている。 エ：誤り。中性脂肪は高値が問題となる。 総合：手引きでは、LDL 140mg/dL以上、HDL 40mg/dL未満、空腹時中性脂肪150mg/dL以上のいずれかを脂質異常症の目安としている。
0134 [心臓・血液に作用する薬] > [高コレステロール改善薬] 難易度：標準	
大豆油不けん化物（ソイステロール）の作用として適切なのはどれか。 ア 大腸を刺激して便秘を改善する。 イ 鉄の吸収を促進して貧血を改善する。 ウ 副交感神経を遮断して胃痙攣を鎮める。 エ 腸管におけるコレステロールの吸収を抑える。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。刺激性瀉下成分ではない。 イ：誤り。鉄製剤の補助成分ではない。 ウ：誤り。胃腸鎮痛鎮痙成分ではない。 エ：正しい。ソイステロールは腸管からのコレステロール吸収を抑える作用を期待して、高コレステロール改善薬に用いられる。 総合：ソイステロールは腸管からのコレステロール吸収を抑える作用を期待して、高コレステロール改善薬に用いられる。

0135 [心臓・血液に作用する薬] > [高コレステロール改善薬] 難易度：標準	
高コレステロール改善成分の説明として、適切なのはどれか。 ア パンテチンはLDL等の異化排泄を促し、リボタンバクリパーゼ活性を高めてHDL産生を高めるとされる。 イ リノール酸は胃酸を中和する制酸成分である。 ウ ポリエンホスファチジルコリンは駆虫成分である。 エ パンテチンは大腸を刺激して排便を促す。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。リノール酸やポリエンホスファチジルコリンはコレステロール代謝促進を期待し、パンテチンはLDL等の異化排泄促進やHDL産生促進を期待して用いられる。 イ：誤り。リノール酸は脂質代謝改善を期待して用いられる。 ウ：誤り。高コレステロール改善薬に用いられる成分である。 エ：誤り。瀉下成分ではない。 総合：リノール酸やポリエンホスファチジルコリンはコレステロール代謝促進を期待し、パンテチンはLDL等の異化排泄促進やHDL産生促進を期待して用いられる。
0136 [心臓・血液に作用する薬] > [高コレステロール改善薬] 難易度：標準	
高コレステロール改善薬に配合されるビタミン成分について、適切なのはどれか。 ア ビタミンEは末梢血行を悪化させるため配合される。 イ リボフラビンの摂取で尿が黄色くなることがあるが、通常は中止を要する異常ではない。 ウ リボフラビンによる尿の黄色化は必ず重篤な肝障害を意味する。 エ ビタミンEはコレステロールからの過酸化脂質生成を促進する。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。ビタミンEは末梢血行促進等を期待して用いられる。 イ：正しい。ビタミンB2は脂質代謝に関与し、尿が黄色くなることがある。ビタミンEは過酸化脂質生成抑制や末梢血行促進を期待して用いられる。 ウ：誤り。リボフラビンによる尿の黄色化は通常、異常ではない。 エ：誤り。ビタミンEは過酸化脂質の生成を抑える作用を期待して用いられる。 総合：ビタミンB2は脂質代謝に関与し、尿が黄色くなることがある。ビタミンEは過酸化脂質生成抑制や末梢血行促進を期待して用いられる。

0137 [心臓・血液に作用する薬] > [高コレステロール改善薬] 難易度：応用	
高コレステロール改善薬を使用する人への助言として、最も適切なのはどれか。 ア 痩身薬として腹囲を減らす目的で用いる。 イ 薬を使えば食事や運動の改善は不要である。 ウ 食事・運動など生活習慣改善を基本とし、1～3か月程度使用しても検査値が改善しなければ受診を勧める。 エ 検査値が改善しなくても年単位で自己判断の連用を続ける。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。高コレステロール改善薬は痩身を目的とする薬ではない。 イ：誤り。薬は食事療法・運動療法の補助的な位置づけである。 ウ：正しい。高コレステロール改善薬は生活習慣改善の補助であり、痩身薬ではない。1～3か月程度で改善しない場合は医療機関で原因評価を受ける。 エ：誤り。遺伝的・内分泌的要因等も疑われるため、改善しない場合は受診が必要である。 総合：高コレステロール改善薬は生活習慣改善の補助であり、痩身薬ではない。1～3か月程度で改善しない場合は医療機関で原因評価を受ける。
0138 [心臓・血液に作用する薬] > [貧血用薬] 難易度：基礎	
一般用の貧血用薬（鉄製剤）が主に対象とする貧血はどれか。 ア すべての種類の貧血 イ 腎性貧血だけ ウ ビタミンB12欠乏による悪性貧血だけ エ 鉄欠乏性貧血	答え・解説 正答：エ ア：誤り。鉄製剤で改善できるのは主に鉄欠乏性貧血であり、他の原因には適さないことがある。 イ：誤り。腎性貧血は腎障害に伴う別の機序で起こり、一般用鉄製剤だけでの対処は適切でない。 ウ：誤り。B12欠乏性貧血は鉄欠乏とは異なる。 エ：正しい。鉄製剤は不足した鉄を補って造血機能を回復させる医薬品で、主に鉄欠乏性貧血に用いられる。 総合：鉄製剤は不足した鉄を補って造血機能を回復させる医薬品で、主に鉄欠乏性貧血に用いられる。

0139 [心臓・血液に作用する薬] > [貧血用薬] 難易度：基礎	
鉄欠乏状態を生じやすい人として適切なのはどれか。 ア 月経血損失のある女性や、鉄需要が増える妊婦・授乳婦 イ 鉄需要がほとんどない成長期の小児 ウ 出血のない健康成人だけが必ず鉄欠乏になる エ 鉄分を十分摂取している人ほど必ず鉄欠乏になる	答え・解説 正答：ア ア：正しい。鉄欠乏は摂取不足・吸収障害・出血に加え、成長期、月経、妊娠・授乳など鉄需要や損失が増える状況で起こりやすい。 イ：誤り。成長期は鉄需要が増えるため、むしろ鉄欠乏を生じやすい。 ウ：誤り。鉄欠乏には摂取不足、吸収障害、出血、需要増大など複数の要因がある。 エ：誤り。十分な鉄摂取は通常、鉄欠乏のリスクを下げる方向に働く。 総合：鉄欠乏は摂取不足・吸収障害・出血に加え、成長期、月経、妊娠・授乳など鉄需要や損失が増える状況で起こりやすい。
0140 [心臓・血液に作用する薬] > [貧血用薬] 難易度：標準	
鉄欠乏性貧血に用いる一般用鉄製剤の成分と服用後の便色変化について、正しい説明はどれか。 ア 便が黒くなった場合は必ず鉄剤による消化管出血である。 イ フマル酸第一鉄などが用いられ、服用後に便が黒くなることがある。 ウ 服用前から黒色便があっても確認する必要はない。 エ 鉄製剤の主成分はビフィズス菌である。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。鉄成分の影響で便が黒くなることがあり、必ず出血とは限らない。 イ：正しい。鉄製剤にはフマル酸第一鉄、溶性ピロリン酸第二鉄等が用いられる。服用後の黒色便は異常でないことがあるが、服用前からの黒色便は出血の可能性に注意する。 ウ：誤り。服用前からの黒色便は消化管出血の可能性があり、確認が必要である。 エ：誤り。ビフィズス菌は整腸成分であり、鉄分補給成分ではない。 総合：鉄製剤にはフマル酸第一鉄、溶性ピロリン酸第二鉄等が用いられる。服用後の黒色便は異常でないことがあるが、服用前からの黒色便は出血の可能性に注意する。

0141 [心臓・血液に作用する薬] > [貧血用薬] 難易度：標準	
貧血用薬に配合されるビタミンの役割として適切なのはどれか。 ア ビタミンB12は鉄を便中へ排泄させるために用いる。 イ 葉酸は胃酸を中和するために用いる。 ウ ビタミンCは消化管内で鉄が吸収されやすい状態に保つ目的で用いられる。 エ ビタミンB6は腸内細菌を殺菌するために用いる。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。B12は正常な赤血球形成に関与する。 イ：誤り。葉酸は赤血球形成に関与し、制酸成分ではない。 ウ：正しい。鉄製剤には、ヘモグロビン産生に必要なB6、正常な赤血球形成に関わるB12・葉酸、鉄吸収を助けるビタミンC等が配合されることがある。 エ：誤り。B6はヘモグロビン産生等に関与する。 総合：鉄製剤には、ヘモグロビン産生に必要なB6、正常な赤血球形成に関わるB12・葉酸、鉄吸収を助けるビタミンC等が配合されることがある。
0142 [心臓・血液に作用する薬] > [貧血用薬] 難易度：標準	
鉄製剤で胃部不快感や悪心が出やすい人への対応として適切なのはどれか。 ア 副作用軽減のため、必ず空腹時に倍量服用する。 イ 胃腸障害が出ても用量を増やして継続する。 ウ 鉄製剤では胃腸障害は起こらない。 エ 鉄の吸収は空腹時に高いが、胃腸障害を軽減する目的では食後服用が望ましい場合がある。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。空腹時は吸収が良い一方、胃腸障害を起こしやすく、倍量は不適切である。 イ：誤り。副作用が強い場合は用量増加ではなく適切な相談・使用方法の見直しが必要である。 ウ：誤り。悪心、嘔吐、胃部不快感、腹痛、便秘、下痢等が知られている。 エ：正しい。鉄製剤では胃腸障害が起こることがある。吸収は空腹時に高いものの、副作用軽減のため食後服用が望ましいことがある。 総合：鉄製剤では胃腸障害が起こることがある。吸収は空腹時に高いものの、副作用軽減のため食後服用が望ましいことがある。

0143 [心臓・血液に作用する薬] > [貧血用薬] 難易度：応用	
鉄製剤を使用する人への説明として、最も適切なのはどれか。 ア 服用前後30分は緑茶・紅茶・コーヒー等を避け、食生活を改善して2週間程度使用しても症状が改善しなければ受診を勧める。 イ 緑茶と一緒に服用するとタンニンが鉄吸収を高める。 ウ 症状がなくても貧血予防のため長期連用する。 エ 2週間で改善しなくても鉄欠乏以外は考えず、そのまま継続する。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。タンニンを含む飲食物は鉄吸収を妨げるため服用前後30分を避ける。2週間程度で改善しない場合は消化管出血等の基礎疾患や他の貧血を考え、受診を勧める。 イ：誤り。タンニン酸は鉄と反応して吸収を低下させることがある。 ウ：誤り。症状がみられる前から予防的に鉄製剤を使用するのは適当でない。 エ：誤り。出血性疾患や鉄欠乏以外の貧血も疑い、受診が必要である。 総合：タンニンを含む飲食物は鉄吸収を妨げるため服用前後30分を避ける。2週間程度で改善しない場合は消化管出血等の基礎疾患や他の貧血を考え、受診を勧める。
0144 [心臓・血液に作用する薬] > [その他の循環器用薬] 難易度：基礎	
循環器用薬に用いられる生薬コウカの基原と期待される作用を正しく示すものはどれか。 ア ヒキガエルの耳腺分泌物を基原とする。 イ ベニバナの管状花を基原とし、末梢の血行を促してうっ血を除く作用があるとされる。 ウ ウシの胆嚢中の結石を基原とする。 エ 大腸内細菌で分解されて瀉下作用を示す。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。これはセンソの説明である。 イ：正しい。コウカはベニバナの花を基原とする生薬で、末梢血行を促してうっ血を除く作用を期待して用いられる。 ウ：誤り。これはゴオウの説明である。 エ：誤り。これはセンノシド等の説明である。 総合：コウカはベニバナの花を基原とする生薬で、末梢血行を促してうっ血を除く作用を期待して用いられる。

0145 [心臓・血液に作用する薬] > [その他の循環器用薬] 難易度：基礎	
ユビデカレノンについて、最も適切なのはどれか。 ア 大腸内細菌を増やす整腸成分である。 イ 胃酸を中和する無機塩類である。 ウ コエンザイムQ10とも呼ばれ、エネルギー産生に関与し、心筋の酸素利用効率を高める作用が期待される。 エ 回虫の筋を麻痺させる駆虫成分である。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。整腸成分ではない。 イ：誤り。制酸成分ではない。 ウ：正しい。ユビデカレノン（コエンザイムQ10）はエネルギー代謝に関わり、心筋の酸素利用効率や収縮力を高めることで血液循環改善を期待して用いられる。 エ：誤り。駆虫成分ではない。 総合：ユビデカレノン（コエンザイムQ10）はエネルギー代謝に関わり、心筋の酸素利用効率や収縮力を高めることで血液循環改善を期待して用いられる。
0146 [心臓・血液に作用する薬] > [その他の循環器用薬] 難易度：標準	
ユビデカレノンを含む一般用循環器用薬について、適切なのはどれか。 ア 小児の心疾患による動悸には自己判断で第一選択とする。 イ 症状が改善しなくても数年間連用する。 ウ 副作用として胃部不快感や発疹は起こらない。 エ 15歳未満向けの製品はなく、2週間程度使用しても動悸・息切れ・むくみが改善しなければ受診を考える。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。小児の心疾患症状は医師の診療が優先される。 イ：誤り。心臓以外の病気が原因の可能性もあり、漫然と継続しない。 ウ：誤り。胃部不快感、食欲減退、吐きけ、下痢、発疹・かゆみ等が起こることがある。 エ：正しい。ユビデカレノンは軽度の心疾患に伴う動悸・息切れ・むくみに用いられるが、15歳未満向け製品はなく、2週間程度で改善しない場合は受診が必要である。 総合：ユビデカレノンは軽度の心疾患に伴う動悸・息切れ・むくみに用いられるが、15歳未満向け製品はなく、2週間程度で改善しない場合は受診が必要である。

0147 [心臓・血液に作用する薬] > [その他の循環器用薬] 難易度：標準	
ヘプロニカートやイノシトールヘキサニコチネートの作用として適切なのはどれか。 ア 体内で遊離するニコチン酸の働きにより、末梢の血液循環を改善する。 イ 鉄を補給してヘモグロ빈を増やす。 ウ 大腸を刺激して排便を促す。 エ 胃酸を中和して胸やけを抑える。	答え・解説 正答：ア ア：正しい。ヘプロニカート、イノシトールヘキサニコチネートは、遊離したニコチン酸の作用によって末梢血行を改善するとされ、ビタミンEと併用される場合が多い。 イ：誤り。鉄製剤の作用である。 ウ：誤り。瀉下作用ではない。 エ：誤り。制酸作用ではない。 総合：ヘプロニカート、イノシトールヘキサニコチネートは、遊離したニコチン酸の作用によって末梢血行を改善するとされ、ビタミンEと併用される場合が多い。
0148 [心臓・血液に作用する薬] > [その他の循環器用薬] 難易度：標準	
循環器用薬に配合されるルチンの位置づけと期待される作用について、正しい説明はどれか。 ア 強い大腸刺激性瀉下作用をもつ。 イ ビタミン様物質の一種で、高血圧等における毛細血管の補強・強化を期待して用いられる。 ウ 胃粘膜を局所麻酔して胃痛を止める。 エ 蟻虫の呼吸を抑える駆虫成分である。	答え・解説 正答：イ ア：誤り。瀉下成分ではない。 イ：正しい。ルチンはビタミン様物質で、毛細血管の補強・強化を期待して循環器用薬に用いられることがある。 ウ：誤り。局所麻酔成分ではない。 エ：誤り。駆虫成分ではない。 総合：ルチンはビタミン様物質で、毛細血管の補強・強化を期待して循環器用薬に用いられることがある。

0149 [心臓・血液に作用する薬] > [その他の循環器用薬] 難易度：応用	
三黄瀉心湯について、適切なのはどれか。 ア 体力が著しく低下し下痢しやすい人ほど適する。 イ カンゾウだけで構成され、ダイオウを含まない。 ウ 体力中等度以上で、のぼせ・顔面紅潮・精神不安などを伴う高血圧の随伴症状等に用いられ、ダイオウを含むため瀉下薬との併用を避ける。 エ 鼻血に使う場合は効果がなくても長期連用する。	答え・解説 正答：ウ ア：誤り。虚弱で胃腸が弱く下痢しやすい人には不向きとされる。 イ：誤り。構成生薬にダイオウを含む。 ウ：正しい。三黄瀉心湯は体力中等度以上でのぼせ・顔面紅潮等を伴う人に適し、ダイオウを含むため瀉下薬との併用を避ける。虚弱者や下痢しやすい人には不向きである。 エ：誤り。鼻血では5～6回使用して改善しない場合は相談が必要である。 総合：三黄瀉心湯は体力中等度以上でのぼせ・顔面紅潮等を伴う人に適し、ダイオウを含むため瀉下薬との併用を避ける。虚弱者や下痢しやすい人には不向きである。
0150 [心臓・血液に作用する薬] > [その他の循環器用薬] 難易度：応用	
動悸・息切れ・むくみを訴える人が循環器用薬を希望している。高血圧症と腎臓病で治療中でもある。最も適切な対応はどれか。 ア 一般用循環器用薬を先に使用し、処方薬は中止する。 イ 基礎疾患は動悸やむくみに関係しないと説明する。 ウ 症状が強いほど複数の循環器用薬を重ねて使う。 エ 基礎疾患が症状の原因である可能性もあるため、使用前に治療中の医師または薬剤師へ相談するよう勧める。	答え・解説 正答：エ ア：誤り。処方薬の中止を自己判断・販売者判断で行うのは不適切である。 イ：誤り。高血圧、腎臓病、呼吸器疾患、甲状腺異常、貧血などが原因となり得る。 ウ：誤り。重複使用は副作用リスクを高め、原因疾患の評価を遅らせる。 エ：正しい。動悸・息切れ・むくみは高血圧症、腎臓病、呼吸器疾患、甲状腺機能異常、貧血等でも起こるため、治療中の人は一般用薬使用前に医師・薬剤師へ相談する。 総合：動悸・息切れ・むくみは高血圧症、腎臓病、呼吸器疾患、甲状腺機能異常、貧血等でも起こるため、治療中の人は一般用薬使用前に医師・薬剤師へ相談する。